針葉樹会報

第 152 号
2023 年 5 月

▲2022年10月2日　南アルプス市芦安山岳館にて
前列左から 中村(雅)、竹中、小島、前神、佐々木(院2)、佐藤(周)、中列左から 佐藤(久)、川名、兵藤、加藤、谷津、淺香(2年)、半澤(3年)、重岡(2年)、岡田、後列左から 小西顧問、大矢、本間、吉川(1年)、井草、亀井(1年)、田村(1年)、下西ノ園(2年)、関(2年)、清水(1年)

目次

【私の思い出の一葉】……加藤 博行 2
■創部100周年記念山行
創部100周年記念　北岳集中登山……前神 直樹 3
北岳行（スーパーシニア隊）……竹中 彰 4
小太郎山（小太郎尾根往復）……中村 雅明 7
北岳・間ノ岳　山行……大矢 和樹 8
白峰三山　山行記録……下西ノ園 尚樹 9
北岳集中登山記録（学生A隊）……佐々木 豪 11
北岳集中登山記録（学生B隊）……淺香 俊敬 12
一橋山岳部100周年記念　北岳集中登山……小島 和人 13
北岳集中登山の感想……小西ほか 14
■記録・紀行
百蔵山（富士山ビュー山行）……佐藤 周一 15
シャモニ・モンブランのろのろ歩き ～前編～……加地 幸雄 16
■追悼―蛭川隆夫会員
卒業後の蛭川さんとの山行など……竹中 彰 20
蛭川さんの思い出……本間 浩 22
蛭川さん追悼……中橋 寿雄 24
蛭川隆夫さんの思い出……小島 和人 25
追悼　蛭川隆夫会員……27
山と私1　～笛吹川と父～……石原 脩 28
『山讃賦』を巡る余話
～作詞者が書き残した「山讃賦」の由来～……加藤 博行 29
「山讃賦」について……松崎 武雄 30
会務報告……32
学生の活動記録……38
編集後記……40

私の思い出の一葉

加藤 博行（1976 年卒）

今からもう４０年以上も前の１９８１年８月、私は大先輩の山田亮三さん、倉知さん、柿原（和雄）さん、そして同期の兵藤さんと共にカナディアン・ロッキーの山中にいた。

右写真は入山して２日目、グレイシャー・レイク上部テント場でのワンショットで、背景には懸垂氷河が見える。撮影者の兵藤さんは、当時企業派遣留学生として米国に滞在し、現地から参加した。

懸垂氷河を背景に（左から 山田、加藤、柿原、倉知）　撮影：兵藤元史

倉知さん以外は海外の登山が初めてのメンバーばかりで、カナディアン・ロッキーの山中では、見る景色すべてが新鮮だった。その一方、グリズリー（北米のヒグマ）に襲われる恐怖を感じ、背景の懸垂氷河が、夜中轟音を立てて崩れる音にも悩まされた。

日本の山とは異質の大自然に分け入って１週間、氷河を詰めてあと一歩のところで、目指すフォーブス山（３６１２ｍ）は天候悪化と日程切れでギブアップ、手痛い洗礼を受けた。

フォーブス山（3612m）目指して（兵藤（前）と柿原）　撮影：加藤博行

その後南に転進してジョフレ山（３４５０ｍ）に登頂できたことで、入山以来、何としてもピークに立ちたい気持ちをやっとの思いで果たすことができた。（詳細は会報６１号参照）

創部１００周年記念山行

創部１００周年記念　北岳集中登山

前　神　直　樹
（針葉樹会会長、１９７６年卒）

１９２２年（大正11年）６月21日に産声を上げた一橋山岳部（東京商大時代から変わらない部名）が昨年１００周年を迎えたことを記念して、昭和10年頃に諸先輩方が厳冬期に初登攀を成し遂げたバットレスを擁する北岳への集中登山を実施した。

参加したのはＯＢ13名と山岳部顧問、学生・院生12名の総勢25名だが、当初は登頂者全員が打ち揃って北岳山頂で記念写真に収まることを考えた。しかし最高年齢が80歳を超え、大半が70台のＯＢと20歳前後の学生では登るスピードがウサギとカメどころか新幹線と自転車ほどの違いもあり、加えてコロナによる山小屋の宿泊制限もあって、結果的に複数の隊が各々の日程、ペースで登頂することとなった。この辺りの調整は山行幹事の佐藤（周）さんが最も腐心したところであった。

結局昨年10月１日～２日にかけて左表の通り６隊に分かれ北岳に登ったが、両日ともこれ以上は無いというほどの快晴に恵まれ、登頂者全員が富士山から全アルプスの山々の絶景に酔いしれた。

	メンバー	行　動　概　要
スーパーシニア隊	本間、竹中、小島、佐藤久、岡田、中村雅、前神、兵藤、川名	9月29日　甲府→広河原→御池小屋 30日　御池小屋→北岳肩の小屋 10月 1日　北岳登頂→広河原小屋 2日　広河原→芦安
ノーマルシニア隊	加藤、小西 (佐藤周は御池小屋にて待機)	9月30日　甲府→広河原→御池小屋 10月 1日　御池小屋→北岳登頂→広河原小屋 2日　広河原→芦安
学生Ａ隊	佐々木、関、清水、谷津（OB）	10月 1日　甲府→御池小屋→北岳登頂→北岳頂上幕営地 2日　幕営地→広河原→芦安
学生Ｂ隊	淺香、田村、重岡、亀井	10月 1日　甲府→広河原→御池小屋幕営地 2日　幕営地→北岳登頂→広河原→芦安
学生縦走隊	半澤、下西ノ園、吉川	9月30日　国立→奈良田→大門沢幕営地 10月 1日　幕営地→農鳥岳→北岳登頂→北岳頂上幕営地 2日　幕営地→広河原→芦安
超高速単独行	大矢	10月 1日　甲府→広河原→御池小屋幕営地 2日　幕営地→北岳→間ノ岳→北岳→広河原→芦安

山行終了後10月２日昼には南アルプス市芦安山岳館に全員集合。高谷山周辺の登山道整備の下見で、桧尾峠～高谷山～夜叉神峠を歩いてきた井草会員も合流し、全員の集合写真（表紙写真参照）を撮った。

その後芦安ファンクラブの清水さんに昔の北岳登山やバットレス登攀を映した貴重なフィルムを見せていただいたが、当時を知るＯＢにはもちろん、我々の世代にも、さらには当時生まれてもいなかったであろう現役世

2022.10.2　北岳（広河原から）　撮影：岡田健志

代にも興味深いものであった。
また山岳館には針葉樹文庫を保管いただいており、こうした図書類を目にした学生部員は部の歴史の片鱗を感じ取ったのではないかと思っている。
山岳館を見学したあと白雲荘に移動、記念の宴を催し、大いに飲み、語ることになった。

今回奇跡的に2日連続の快晴に恵まれたことや、大事に至るような事故は起きなかったことなど、北岳が創部百周年を祝ってくれていたのかと感じた次第。

北岳行（スーパーシニア隊）

竹中　彰（１９６４年卒）

今回の創部１００周年記念山行、小生としては北岳の頂上を踏んだ後は主力隊と別れて、八本歯のコル経由で大樺沢左股に下り、数年前にチャレンジして挫折したバットレスを近くで良く観察したいと考えていた。この下山時のルートに岡田さんが良い写真を撮りたいとのことで同行することとなった。

スーパーシニア（SS）隊メンバー：
本間（40）、竹中（39）、小島（40）、佐藤久（41）、岡田（42）、中村雅（43）、前神（51）、兵藤（52）、川名（63）・・・・・・（　）内卒年（昭和）平均年齢75・2歳

行程：
9／29　甲府集合 8:30（バス 9:05 発）広河原着 10:54　発 11:07　7ピッチ　白根御池着 15:23
9／30　白根御池発 6:00（7ピッチ）小太郎分岐 9:50-10:21）（2ピッチ）肩の小屋着 11:15
10／1　肩の小屋発 5:28（3ピッチ）北岳頂上着 6:26-6:45　吊尾根分岐 7:10-15　八本歯のコル 7:55-8:15　左股 8:55-9:05（直後にスリップ、岩に頭部を打ち停止）（3ピッチ）二俣 11:14-30（2ピッチ）　白根御池小屋 12:40-13:05（3ピッチ）　広河原山荘着 15:53
10／2　広河原（バス 10:00 発）　芦安着 11:00　芦安山岳館～白雲荘で記念懇親会（ジャンボ taxi 16:56 発）　甲府駅着 17:25（あずさ）八王子着 19:04

行動記録
9／29　快晴
前夜に山岳部同期（チーフリーダー）の蛭川さん逝去の知らせを広島の村上さんから受けたが、直後にトーチン会メンバー宛訃報連絡を回したのみで、取り敢えず自宅を6時過ぎに出発。予定通り甲府駅に集結し、バス停に移動したところで参加者に訃報を伝える。バスは、木曜日の所為か乗客は我々以外には4−5名程度とガラガラの状態。２０１５年9月のバットレス第四尾根挑戦時以来の久し振りの野呂川林道で懐かしく渓谷美に目を向ける。
大樺沢ルートが通行止めになっているため急登の続く尾根道を第一ベンチ、第二ベンチと進む。登山道は7年前の記憶に比べて、木製の階段、ハシゴが増え、かなり整備が進んでいる印象であった。広河原スタート後4時間15分で白根御池小屋に到着し、通常のコースタイムに遅れること1時間余だったが、初日入山の歩行としては悪くない。

小屋に到着後、2階の寝床の確保等行うがコロナ対策でスペース的には余裕のある区画となっており、安全性は保たれていると感じられた。寝床をセット後一階の談話スペースに持参のアルコール類などをもって集合し、

懇談する。

なおトイレが6年前には小屋に併設されてはいたが、利用には一旦外に出て回り込んでいたのが屋内に設置されていたことは大いなる改善と感じた。清潔な水洗式であることは変わっていなかった。

9／30　快晴

5時過ぎに起床後、朝食前に外に出て空模様を窺うと、絶好の登山日和で、北岳方面はバットレスの壁が次第にピンク色に染まっていく。百周年記念登山は問題なく成功との予感がする。

6時に出発するが、中川さん達とバットレス挑戦した2010年10月、本間さんのメステントで前夜に懇談したこと等が懐かしく思い出される。二股への道を左に分けて本間さんトップのオーダーで草すべりに取付き、ピッチ30分前後のペースで次第に草の斜面に標高を稼いでいく。

季節外れで高山植物の群落などは見られなかったが、マルバダケブキなどの残りが一部立ち枯れ状態になっている間をジグザグに進み、池の端から3ピッチでダケカンバの大木が散在する地点に着き、鳳凰三山などを展望する。

この先で、パーティは2分、私は先行することとした。その後はダケカンバの林を縫って進み、森林限界を越えて間もなく左手に植生防護のシカ柵が現れた。その先に大樺沢右股（二股）への分岐があり、眺望も利く様になる。この辺りで下ってくるパーティとスレ違うことが多くなり、外人パーティも結構多い印象であった。2ピッチ程で小太郎尾根分岐に着き、後続を待って小屋で用意された弁当を食しながら休む。

本隊も逐次到着し2890mピークに向かう。ピークからは北岳方面を除いて、仙丈、甲斐駒など近くのピークを始めとして略全方位の山々が見渡せ、広大なアルプスの中での存在感を十分に味わえた。

「肩の小屋」に向けてスタートしたが、先の見通しがついたところで夫々の好みに応じて稜線遊歩を始める。小生がトップグループで進んでいる途中で、追い越して行く単独行者が長い自撮り棒を担いでいるので尋ねると、360度恰もドローン撮影している様な映像を撮れるカメラ、との説明に技術進歩の速さに感心した。

仙丈岳等周囲の景色に励まされて歩を進め途中で立休み等を交えて分岐のピークから1時間弱で肩の小屋に到着し、小屋前のベンチで後続を待って休憩。待つこと10分余で最初に佐藤、岡田の2名が到着する。本隊を待って小屋で受付を済ませ、指定の寝る場所を確保後食堂兼談話スペースで持参のアルコールを出して歓談する。

小屋は以前の小屋から拡張、改良工事中で未だ完全に仕上がっていない。ただ、トイレが屋外にあり、小屋から少し離れているのが難であった。

「豚肩ロースステーキ」の夕食は低い食卓に隣とかなり近接して窮屈であり、胡坐の苦手な小生としては落ち着かなかった。

食後も同じ場所で酒盛り歓談の続きを行う。消灯時間に2階の寝床に引き揚げ、適度な疲れから直ぐ眠りに落ちる。夜間に2度ほどトイレに立つが、戸外に出たところで満天の星空と伊那方面の灯りに、寒さを忘れて暫し見とれる。

10／1日　快晴

4時半過ぎに起床して食堂前に並ぶ。食事の際に@200円のお湯をテルモスに詰めて貰う。食後に八本歯に向かう小生と岡田さん

は荷物をパッキングして小屋の前に出る。他のメンバーは頂上往復してこの小屋に戻るので、メインザックは小屋にデポし、サブザックで向かう。

5:30 前にスタートして、途中少憩を入れて2ピッチで頂上に達する。最初の急登を越え、右に野呂川方面への道を分けた３１００ｍの先で次第に富士山を始め、北岳の山体に隠れていた南に連なる峰々が姿を現した。

このルートからの北岳山頂への道は初トレースだったので興味深い眺めではあった。6:20 過ぎに 10 人余の登山者がいる頂上に達した。頂上では富士山、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳等など遮るもののない眺望を楽しむと共に、同行の皆さんに声掛けをして北の空に向かって「蛭川さんの御霊安かれ」と黙祷を捧げた。

記念撮影などを行った後に、6:45 に岡田さんと二人、本隊と別れて八本歯ノコルに向かって頂上を後にした。暫く北岳山荘方面にクサリ場などを下り、7:15 にコルへの分岐に達して一息入れ、トラバース道に入った。

６月頃ならキタダケソウ、ミヤマキンバイ、チョウノスケソウ等の高山植物が咲き誇るルートであるが、時季外れの今は岩屑混じりの広大な斜面が広がるばかりであった。

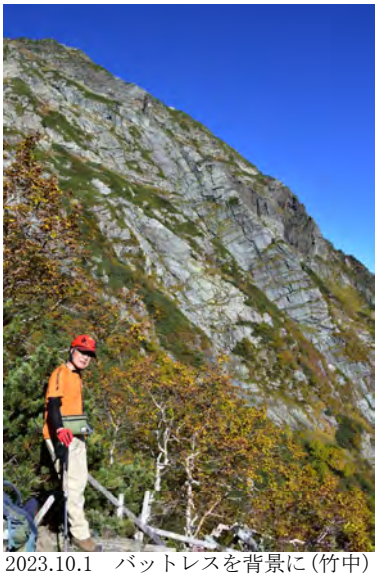
数年前に芦安ファンクラブの企画でキタダケソウの観察会に本間さん他と参加したが、もう再訪は叶わないなと感じながら進んだ。トラバースが終り、コルに向かって下降する部分は以前に比べてハシゴ等の整備が一段と進み、安全性が高まっている感じを受けた。

八本歯のコルには 7:55 に着き、岡田さんと休憩しながら「八本歯の頭」の方に少し進み、アングルを変えてバットレス側面をカメラに収めた。20 分ほどの休憩の後に気を引き締めて左股に向けて下りにかかった。

コルからの下りも以前から要所にはハシゴや桟道が架けられていたが、その整備が更に進んでいる印象を受けた。登ってくるパーティは僅かであったが、上部ですれ違った。

バットレスを横目に緊張の下りが続き、所々でカメラを向けながら進む。四尾根のマッチ箱の下の比較的大きなハイマツのテラスを探し、２００８年から数次に亘ったチャレンジの最終回、２０１５年秋の挑戦の際に休憩したポイントであったと回顧する。

尾根筋に立つ大きなダケカンバでバットレスに別れを告げ、最後のハシゴを下り沢筋に降り立った。先行していた岡田さんに合流して一息入れる（8:55-9:05）。


2023.10.1　バットレスを背景に（竹中）
撮影：岡田健志

二俣に向けて沢筋を最後の頑張りで下ろうと一歩足を降ろしたところで、不安定な砂礫混じりの斜面が崩れて、片手に持っていたストックを突いて体勢を立て直すこともできず横倒しのままズルズルと滑る。頭が下になっていたためザックを背負ったままの窮屈な姿勢で、斜面を落ちて下の比較的大きな岩に頭から当たって止まる。幸いヘルメットを装着していたので、ゴンとショックを感じて止まることが出来た。下向きの体勢だったために、起き上がるのに暫し時間を要したが、ユックリと頭を上に元の姿勢に戻した。頭に外傷等は負っていなかったが、胸から左脇腹にかけて打撲と擦り傷の痛みを強く感じた。斜面の

砂礫の中に所々出ていた岩に当たりながら滑ったことに依ると思われた。滑った本人の感覚としては4―5m位落ちたと思ったが、横で見ていた岡田さんの感じでは1―2m程度ではなかったかとのこと。

その後は胸などの痛みが続く。相変わらず足元は不安定なので一層慎重に下り始めた。予想以上に長い下りに消耗したが、何とか二股の出合に到着し、先に到着していた本隊と合流できた（11:14-30）。

昼食をとり乍ら事の概要を報告し、擦り傷を簡単に消毒し、取り敢えず白根御池小屋に向けて出発した。2ピッチで小屋に到着し、小西顧問他のメンバーとも合流した。小屋の管理人に事情を話すと、応急の消毒程度は出来るとのことなので、小屋に上がって念入りに消毒して貰った。管理人は本来北岳山荘にいるが現在建て替え中で下の小屋に手伝いに来ているとのことだった。手当に対してお礼を申し出たが、当然のことだとして受け取って頂けなかった。

小屋を出発する際に、前神さんからザック中の不要品などを出して負担軽減するようにとの声がかかり、お言葉に甘えて雨具等若干の荷物を出してお願いした。

小屋を出発して3ピッチひたすら下って、15:43に新築の広河原山荘に到着した。

事故を起こしたとは言え、仲間の協力で何とか自力でバスに乗れる地点まで帰着したことに大いに安堵した。針葉樹会の同行の仲間には感謝の言葉しかない。

夕食はロビー横のラウンジ的な場所でサーブされたが、山小屋と言うより、ホテルライクな一ランク上のスペースとの感じであった。

10／2　快晴

南アルプス山岳館に向い、係員から清水准一館長のご厚意による無料入場券を受け取って入館した。後続の学生含めて全員揃ったところで、「針葉樹文庫」についての解説などを中村さん、竹中で行い、今後の文庫管理について山岳部員の継続的な協力を依頼した。

その後清水館長の挨拶を受け、同氏の解説を含めて北岳関連の短編ビデオを鑑賞した。全てが終った所で館の前で記念撮影を行って解散し、懇親会場である隣接の「白雲荘」に移動した。懇親会は芦安ファンクラブ会長でもある清水准一さんをゲストに招き、乾杯後に「白雲荘」が準備した料理、参加者全員のコメントを肴に和やかに進行した。

翌日整形外科を受診したが軽度の肋骨骨折だったが、結局診療終了宣言は12／7まで長引いた。

（2022．12．28　記）

小太郎山（小太郎尾根往復）

中村　雅明（1968年卒）

小太郎尾根については金子晴彦（1971年卒）さんの「小太郎尾根往復」2015．9．（注1）の素晴らしい写真と秀逸な記述を読んで、北岳に登る機会があったら是非訪れようと思っていました。

9月30日、小太郎尾根分岐から小太郎山までの小太郎尾根、その後ろには甲斐駒の雄姿が見えました。期待した通りの好ましい小太郎尾根です。明日の期待に胸弾みました。

10月1日、早朝北岳登頂後、白根御池小屋へ下るSS隊6名と小太郎尾根分岐で別れ、一人、小太郎山に向かいました（8:30）。

コースタイムは行き1時間20分、帰り1時間30分です。最低部の先の小ピーク（2646m）で小憩した後、9:54小太郎山に到着。分岐から1時間24分、ほぼコースタイムで

す。一部不明瞭な箇所がありましたがだいたい稜線沿いの道でした。頂上は無人、静けさと大展望を独り占めしました。北の方向にはアサヨ峰、その後ろに甲斐駒が頭を出しています。西の方向に仙丈岳がどっしりと聳えます。来た方向には北岳が聳え、圧倒的な迫力です。

頂上に20分程滞在し10:18発。帰路はかなり息を切らし、11:40分に小太郎尾根分岐に戻りました。帰りには小太郎山に向かう親子

2023.10.1　小太郎山へ向かう中村　撮影：川名真理

づれ2人、単独行1人とすれ違いました。往復3時間10分でした。コースタイムを超過しましたが、ほぼ満足できる往復行でした。

（注1）本山行は金子さんが藤原朋信（1969年卒）さんに同行したものです。

北岳バットレス第4尾根を足掛け7年でトレースした後の延長山行です。往復2時

2023.10.1　小太郎尾根から北岳　撮影：中村雅明

間20分のハイスピードです。HPの『国内山行報告』に掲載されています。

北岳・間ノ岳　山行

大矢　和樹（2018年卒）

期間：2022年10月1日―10月2日

メンバー：大矢和樹（単独）

行程：

2022年10月1日　快晴

11:30　広河原 ― 13:00　白根御池小屋

2022年10月2日　快晴

2:55　白根御池小屋 ― 3:50　北岳肩の小屋― 4:15　北岳（休憩15分）― 5:20　中白根山 ― 6:00　間ノ岳（休憩20分）― 6:55　中白根山 ― 7:55　北岳（休憩20分）― 9:20　白根御池小屋（休憩、撤収40分）― 11:05　白根御池小屋

直前まで仕事の状況が読めなかったため、山岳部創部100周年登山への正式参加表明はしていなかったが、ある程度落ち着いていたこともあり、直前に類似のルートを辿ることをもって急遽参加することにした。北岳し

か登山しないということになると、晴れた1泊2日登山としてはあまりに勿体ないので、2日の12時広河原発のバスに必ず乗らないといけない制約はありつつ、一人、間ノ岳往復を試みた。1日目は朝自宅から行かなければならなかったことから、広河原着は11時を過ぎてしまい、この時点でテント場が狭い肩の小屋まで登山することはあきらめ（肩の小屋まで行ってもまともなテント場が開いていない可能性が高い）、大変短いが白根御池小屋までの登山とした。しかし、1日目に白根御池小屋までしか到達できなかったことから、間ノ岳まで往復し、12時のバスに間に合わせるためには、休憩なしで常にコースタイムの7割のペース、テント撤収時間や休憩も考えると6・5割のペースで歩かなければならなかった。そうした事情から、間ノ岳に6:50までに到達できなければ引き返すことにした。

2023.10.2　北岳（間ノ岳から）
撮影：大矢和樹

結果的には、1日目に相当体力を温存でき、標高の低い白根御池小屋に荷物の大半を置けたことから、予定を遥かに上回るペースで登ることができ、悠々間に合わせることができた。特に白根御池小屋から肩の小屋までの「草すべりエリア」は登りも下りもコースタイムの4割台前半で行き来することができ、ここでの時間短縮が全体をスムーズにする要因となった。2022年は学生時代も含め、これまでで最も登山した年であったが、登山回数の増加による体力増強もその一因であったのかもしれない。

北岳は部員時代に登って以来、久々だった。当時と比べても現在のほうが圧倒的に体力があり、スピードも上がったと感じる。今後も体力を落とすことなく、いろいろなところに登りに行けたらよいと感じた。

白峰三山　山行記録

下西ノ園　尚樹（経2）

期間；2022年9月30日～10月2日

メンバー；

半澤凌平（社4、CL／装備）、下西ノ園尚樹（経2、SL／記録）、吉川昌希（社1、食料）

コースタイム

【9／30】 快晴　8．3km（登り1150m／下り254m）

奈良田バス停 13:10―14:10 大門沢登山道入口―16:08 大門沢小屋（泊）

【10／1】 快晴　11．9km（登り2243m／下り971m）

大門沢小屋 04:26―08:05 農鳥岳 08:34―08:57 西農鳥岳 09:26―09:53 農鳥小屋―11:15 間ノ岳 11:50―12:54 北岳山荘 13:53―14:58 北岳 15:21―15:40 肩ノ小屋（泊）

【10／2】 快晴　4．5km（登り44m／下り1513m）

肩ノ小屋 05:00―06:38 白根御池小屋

07:04――08:25 広河原＝＝＝芦安（解散）

☆行動と感想

今回は三人で、白峰三山を二泊三日で縦走した。パーティは4年のＣＬ半澤、２年のＳＬ下西ノ園と1年の吉川で構成される。

初日はまず登山口の奈良田から、大門沢小屋まで登る行程だった。中央線の遅延により奈良田の登山口に到着したのが予定よりも2時間遅れの12時半ごろとなってしまった。コースタイムでは小屋着が17時と、日の入りが18時前であることを考慮すると遅くなってしまったが仕方ない。今回の山行では地形図も持参したが基本的にルートを探すのにＧＰＳを活用した。ＣＬの半澤のみがＧＰＳをオンにしていたが、緊急時に備えてＳＬである自分もＧＰＳを使用できる状態にしておくべきと感じた。特に大門沢を上がるルートは、登山者もそれほど多くなく、迷いやすい箇所もあったためそのように感じた。奈良田のバス停から1時間ほど歩くと登山道の入り口に到着した。登山道は基本的に沢に沿っていて砂防ダムの脇を何度か通過し、小屋には16時頃到着した。初日は距離も長くはないため、小屋まですぐに到着し疲労もあまり感じなかった。到着後はすぐにテントを設営し、夕飯の準備に取り掛かった。米はコッヘルを使って炊いたが成功した。一年の吉川の水の配分がよかったのだと思う。メインはプルコギで肉とカットした野菜を炒めた。火が通るのに時間がかかるため特に野菜のカットは小さ目がよい。また油と調味料を忘れないようにしたい。大門沢小屋は水が豊富であり、持参した空のペットボトルに翌日分の給水を行った。今回の山行では銀マットを持参しなかったため、クッションとなるのはスリーピングマットのみだった。多少地面の凹凸を感じたが快適性には大きな差はなかった。到着の遅れも考慮して翌日の起床時刻は30分遅らせて3時にすることにして就寝した。

二日目は一日を通して快晴だった。まず反省として起床が3:20になってしまった。自分がアラームを他人任せにしてしまったのが問題だった。その後は問題なく準備を済ませ4:20に小屋を出発した。日の出前のためヘッドライトを点灯して進んだが、何度か道を間違えてしまいその度にＧＰＳを確認した。特に一度は沢に迷い込んでしまったので注意したい。稜線までは険しい上りが続き、３時間で大門沢分岐点まで到達した。

そこから30分ほど上ると一つ目のピーク農鳥岳山頂に到着した。雲ひとつなく景観は素晴らしかった。次に登る間ノ岳、北岳を確認しながら進むことができるのが縦走の面白いところであり、またその長い道のりに呆れてしまうところでもある。次に一時間弱かけて西農鳥岳へと向かったのだが、どのピークもアップダウンが大きい印象を抱いた。農鳥小屋で休憩を挟み、間ノ岳山頂に向けて早いペースで登っていった。山行後に振り返ると間ノ岳の登りが一番きつかったとパーティの全員が思っていた。

一度山の中腹で休憩を挟み間ノ岳山頂には11:20に到着した。全員が疲労を感じていたので、間ノ岳を下り北岳山荘で長めの休憩を取ることを決めた。山荘でカップラーメンを購入して食べ、疲労は多少回復したと思うが、北岳山荘に宿泊し翌日北岳に登るのが体力的にはベストであったと思う。

小一時間の休憩を挟み、15:00に北岳山頂に到着した。山頂で本隊のメンバーとたまたま合流し記念撮影をした。出発が遅れ、途中長めの休憩をとりはしたものの当初の予定時刻に到着することができた。肩の小屋は混雑していたためテントを張るのに十分なスペースがなかった。テントの下がゴツゴツしていて銀マットもなかったため寝心地はあまりよくなかった。またシュラフに入っていても想像していた以上に寒かった。夏用のシュラフでは少し寒いくらいだった。夕食を摂ってからすぐに就寝し、残りの行程は下りのみだっ

たので翌朝は、４時に起床した。そして最終的に広河原には９時ごろに到着した。
　天気もよく非常に気持ちの良い縦走路だった。今後も積極的に縦走に挑戦していきたい。

北岳集中登山記録（学生Ａ隊）

佐々木　豪（修１）

期間：２０２２年10月１日～２日
メンバー：佐々木（修１）、関（法２）、清水慧（社１）、谷津（ＯＢ）

10月１日　天気：快晴

　今回の北岳登山は通常の山行と異なり山岳部１００周年を記念したもので、ＯＢと学生が多数参加するものになった。パーティは複数に分かれており、下山後に全員が合流するプランだった。我々のパーティ構成には学生３人とＯＢ谷津さんが加わった。ルートは広河原から北岳山頂のピストンで、途中の肩の小屋で幕営することになっていた。
　学生は甲府駅で集合し、そこに谷津さんも合流した。天候は雲ひとつない快晴で、日差しが強く、きつい登りでは汗がよく出た。９時ごろバスで広河原につき、登る前に学生隊をＡＢ二隊に分割して、我々Ａ隊は先行して上ることになった。
　広河原からの登り始めは樹林帯の長い道が続く。この辺りは日陰や沢があり、気温が上がっていくなかでも少しの清涼感があり、気持ちのいい登りであった。秋の行楽シーズンでかつ晴天の週末であったこともあり、登山客は多かった。自分たちと同じルートで上る人も下りてくる人もおり、多くの人とすれ違った。今回の山行ではほとんどの道で、自分が先頭を歩いた。最初からやや速いペースで歩いたため、後発のＢ隊と差がついてしまった。
　11時ごろ白根御池小屋に到着し少し休憩をとった。そこで前日から山に入っていたＯＢの方とも会い、ＯＢパーティの状況などを聞いた。白根御池小屋についたタイミングでかなり混雑しており、肩の小屋も混雑していることが予想されたので、Ｂ隊を待つことなく出発した。
　草すべりの登りはやはりきつく、気温もあがったので体力をかなり消費した。登り切った稜線上では抜群の景色を拝むことができた。14時半ごろに肩の小屋に着くと、かなりの数のテントが張られており、予想通りに多くの人が泊まっていた。我々が小屋についた少し後にＢ隊の淺香（経２）が我々に追いついてきて、Ｂ隊で体調不良者が出たために白根御池小屋で幕営するとの報告を聞いた。我々は登山道の近くに何とか一張りはれる場所を見つけることができた。もう少し到着時間が遅れてしまったら、テント適地を探すのにもっと苦労したかもしれない。
　テントを設営し少し休憩したのち、谷津さんの提案で北岳の山頂に上ることにした。山頂周辺は目で見ているよりも長く、岩がちな道だったので、空身で上ったがやや疲れる登りだった。我々が山頂に到達した時点で他にも何人かの登山客がおり、山頂は少しにぎわっていた。その中には我々のルートとは逆の農鳥岳方面から登っていた半澤（社４）のパーティもおり、期せずして山頂という考えうる最高のロケーションで合流することになった。
　その日の夕食後は、夕焼けがきれいだった。谷津さんから頂いたウイスキーもとてもおいしく感じられた。

10月２日　快晴

　４時半ごろに起床し、もう一度北岳の山頂を目指した。私自身はヘッドライトを忘れてしまい、テントで留守番をすることにしてい

た。ほかのメンバーが山頂にのぼっているあいだに、半澤のパーティはテントを撤収し、我々よりも先に下山していった。

テントを撤収し下山を開始するタイミングでB隊が登ってきたので、彼らの状況を聞くことができた。その話では体調不良になっていたメンバーは回復したとのことだったので、少し安心することができた。

８時ごろに白根御池小屋に帰着し、テントで休んでいるという体調不良のメンバーの様子を見ようとしたが、テントが多く、見つけることができなかった。ここで時間を空費するのももったいないと考えて、下山することを決めた。今から考えれば、山頂に上るB隊を白根御池小屋で待ってから、下山したほうが安全面では良かったかもしれない。

９時半ごろに広河原に到着できた。広河原山荘付近では学生・ＯＢがバス待ちなどしており、彼らと無事に合流することができた。バスの時間ギリギリになってからB隊も広河原に到着して何とか間に合うことになった。

今回の山行は快晴に恵まれたため、気持ちのいい登山をすることができた。１００周年を祝う登山としては最高のコンディションだったといえる。その一方で、体調不良者が出たパーティを当事者たちに任せっきりにしてしまったことは反省するべき点だと考える。今回は事故などが起きなかったので、よかったが今後はどうなるかわからない。今回は体力のあるパーティを先行させてしまったため、後発のパーティとの連絡が疎になってしまった。複数のパーティに分割するのであれば、できるだけ後発パーティに体力のあるメンバーを加えるべきだろう。そのような反省点がありながらも、全体としては満足のいく登山をすることができた。

北岳集中登山記録（学生B隊）

淺香　俊敬（経２）

メンバー（ＣＬはＡ隊）

淺香俊敬（経２／ＳＬ）、田村健（社１／装備）、重岡諒（社２／食事）、亀井奏良（経１／食事）

期間：２０２２年10月１日～２日

コースタイム：

【10／１】 快晴　距離６㎞、登り１２６３ｍ、下り５３７ｍ

広河原9:10――11:30白根御池小屋11:55――12:20 草すべり途中（12:30――淺香連絡――13:40 北岳肩の小屋13:50――14:30）草すべり途中 14:40――15:10 白根御池小屋（泊）

【10／２】 快晴　距離９㎞、登り９５７ｍ、下り１６８３ｍ

4:00 白根御池小屋 5:00――6:40 北岳肩の小屋6:50――7:20 北岳山頂7:55――9:30 白根御池小屋 10:15――11:50 広河原 12:00==13:00 芦安（解散）

行動と感想

この山行の反省点は分隊を作る際の連絡方法と行動予定の周知をどうするか、にあるが、それは後述する。

B隊はA隊出発の数分後に広河原を出発した。久しぶりの宿泊山行であったこともあり遅めのペースで歩いたため、先発隊と２０分ほどの差がついた状態で白根御池小屋に到着した。小屋ではＯＢの方々と少しお話をしてから肩の小屋へと出発した。ここまでは急登はあったが特に問題なく登ることが出来た。

問題が起きたのは白根御池を出発して30分ほど歩き２００ｍほどさらに標高を稼いだ頃であった。亀井君が頭痛を訴えたのである。彼は部室の前泊に来るのが遅めだった上に電車とバスの中でも読書していたため寝不足になっており、高山病が疑われた。登山隊が自分たちだけであれば間違いなく白根御池への

撤退を決めていたが、連絡手段の乏しいA隊が先行しており、引き返す場合は誰かが急いで連絡に行く必要があった。結局以前登った経験がある淺香一人でA隊を追いかけ「白根御池へと引き返す」と伝えることになった(ここで引き返すことを決定したはずではあるが、それを周知出来ていなかったため残りの三人が亀井君の回復後に再び登り始めてしまった)。

少しの水と食料をポケットの中に忍ばせてA隊との間の往復を試みたが、結局追いついたのは肩の小屋であった。白根御池で泊まる旨を伝えた後、先発隊に水と行動食を少しだけ貰ってB隊へと戻った。登りですれ違った人と再度すれ違いつつ道を下ると、自分が単独行動を開始した地点より上でB隊の残りと合流した。聞くところによると、亀井君が回復したために肩の小屋まで行くことが可能だと判断し、淺香の荷物を代わる代わる持ちながら登ってきたらしい。これは連絡に走っている人が承知していない上にメンバーの体力をすり減らす悪手であったように思う。これは白根御池に引き返す決定を十分に理解してもらう前に出発してしまったことによるが、このような場合は待っているグループは動かないのが鉄則である。

合流してからは下りだということもあり、30分ほどで白根御池に到着した。すぐに空いている場所にテントを張り、日の沈まないうちに夕食を作った。B隊は無事調理出来たが、A隊は一部の炊事道具が足りなかったはずであり、そこは隊が分かれてテン場に泊まったことが原因だ。また、ここで翌日は4時起床5時出発で亀井君を除く三人が山頂へ行くことを決定した(亀井君も体調次第で参加する)。

2日は5:00に三人で出発した。亀井君は体調には問題はなさそうであったが大事を取って白根御池にとどまることになった。その後は空荷であったこともあって問題なく、道中で別の隊とすれ違いつつ7:20頃に山頂に到着した。周囲全てを見渡せる晴天であったが、個人的には近傍の山の眺めよりも別の登山者が掲げていたインドネシア国旗が印象的であった。思えば道中ではカナダ人やフィリピン人ともすれ違ったのでかなり国際的な山であった。

その後は白根御池に戻ってテントを撤収し、広河原まで下った。下山後の懇親会に間に合わないことも覚悟していたが、会に間に合う最後の便が出発するギリギリに滑り込みで下山し、乗車することが出来た。

今回は隊を分ける場合の連絡手段をどうするかが課題だと思う。今後、トランシーバーを買ったり、先発隊と後発隊の合流地点をこまめに設定するなどの対策をとるようにしたい。

一橋山岳部１００周年記念
北岳集中登山

小島　和人（１９６５年卒）

創部１００周年記念に北岳集中登山をやろうという案は４年ほど前に出た。最初は80歳後半でも山歩きをしておられた、尊敬する佐薙先輩が90歳になっても登山を続けておられるであろうとの推測で、必要なら途中にテントも準備して、日数を掛けてでも佐薙さんを中心にして北岳に登り百周年を祝おうとシニア針葉樹会員の間で話し合っていた。

しかし２０２０年から憎きコロナが始まり、３年間規制のかかった日々が続き、最初は山小屋も全て自主規制を実施した。登山はなかなか困難になった。それでも20年21年とも夏にシニア仲間で蓼科山・黒姫山と登れた。そのときは、コロナが怖くて佐薙さんを

誘うのは控えた。

そして22年、年初から私は狭窄症からくる坐骨神経痛に悩んでいて、集中登山を検討する時期になっても、自身の体調がはっきりせず、企画の具体化は針葉樹会の若手幹部の皆さんに任せるより他なかった。佐薙さんを誘うことも躊躇していた。同行を期待していた本間さんも6月の時点で足の調子が悪く靴を履けない状態との事で、お先真っ暗だった。

それが7月上京した小野さん半場さんと国立で飲んで、次の日、本間さんも誘って高尾山に登ってみた。たった200mぐらいの高度差だったが歩いて登れた。そこで初めて本間さんと集中登山に参加することを話し合った。それでも具体的参加表明が出来ず、同様の身体状態にある佐藤久さんを誘い、用心棒を竹中さんにお願いして、新潟の弥彦山・米山に登った。高度差300mと700mを、夏の強い日差しの中で登れた。それで針葉樹会の計画に1日追加しての登山参加を8月になって表明した。この段階で佐薙さんと話し合ったがコロナの影響もあり、佐薙さんは不参加の意思が固くやむを得ないと判断した。

参加資格があるかどうかを確認する為に、標高差900mの大山を最後の試験場にすることにして同じメンバーで2回登った。かくて10月1日の早朝、快晴の北岳の頂に仲間と共に立つことが出来た。本間さんをはじめとする会員の皆さんの協力の賜物で感謝に耐えない。しかしこの3年間山登りにご一緒出来なかった佐薙さんとは今回もご一緒出来ず、申し訳なく誠に残念で、この3年間の過ごし方について大いに反省したがあとの祭りであった。

2022.10.1　北岳頂上にて　撮影：岡田健志

北岳集中登山の感想

台風の影響が危ぶまれましたが、奇跡的に好天に恵まれ最高の100周年記念山行になりました。

前神さん、加藤さんと一緒に見た北岳山頂からの富士の眺望は、忘れられない思い出です。

決して「登山客」の域を出ない私を暖かく迎え入れて下さったOBのみなさんに、心より感謝申し上げます。ちなみに白雲荘の貸し切りの温泉、最高でした！

（山岳部顧問　小西　大）

北岳へ登ったあとは、池山吊尾根を八本歯のコルまで行き、そこから大樺沢を下りたいと計画していた。池山吊尾根の記憶といえば、雪のついた季節のそれしか残っていなかったが、今度通ってみてまったく初めて歩く感じだった。

1966年3月は、非常に風が強く、通過するのが困難だったが、この日は風もなく、快晴の下気分よく歩けた。

（岡田健志　1967年卒）

記録・紀行

百蔵山（富士山ビュー山行）

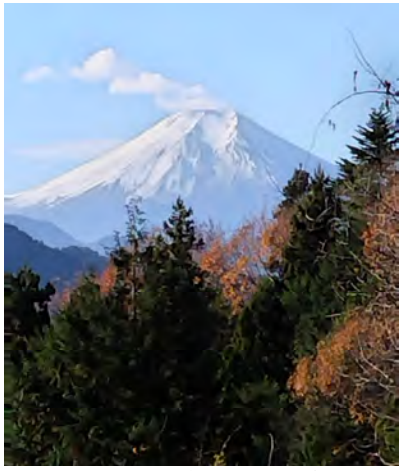
佐藤　周一（１９７９年卒）

期　日：２０２２年12月４日（日）

参加者：本間浩（１９６５）、井草長雄（１９７３）、前神直樹（１９７６）、加藤博行・兵藤元史（１９７７）、佐藤周一（１９７９）、内山晴貴（２０２２）、小西大（山岳部顧問、１９８７）、窪田さん（井草氏友人）（学生）岩崎太一（法４・主将）、山下弘喜（商４）、淺香俊敬（経２）

１．準備段階

新型コロナ禍３年目の富士山ビュー山行は、昨年の扇山（１１３８㍍）の隣の百蔵山（１００３㍍）としました。変わり映えしない感はありますが、中央線沿線でアクセスが容易なこと、山頂が広く多人数でも憩い易い等の理由から選択しました。11月半ばには懇親会場探しを主目的に地元に詳しい小西顧問をお誘いして下見山行に出掛け、登山口の猿橋駅からひと駅先の大月駅前に手頃な店を見つけて12月予定日の予約を入れ、針葉樹会員皆さまへ案内しながら当日の晴天を待つばかりとなりました。



2022.12.4　富士ビュー山行
撮影：加藤博行

２．当日の状況

一週間ほど前の天気予報は余り芳しくない予想だったので、予備日（12月11日）に変更かなと心配しましたが、三日ほど前から好天予想となり予定通り実施。この時期は富士急バスが土日祝に登山口までのバスを運行しており、９時丁度発のバスで移動。住宅地の中の勾配有る道を数分で百蔵山登山口着。ここから身支度を整え登山開始。風も無く穏やかな天候に恵まれ、ゆっくりと登りました。尾根筋に出たところで展望台があり、ここ数日の寒波のためか白銀に輝く富士山が松の木越しに望めます。

落ち葉を踏みしめながら幅の広い心地良い縦走路に出て右に15分ほどで大勢の登山者で賑わう山頂に到着。四方津のご自宅から別ルートで先着していた小西顧問と合流。扇山から縦走してきた学生隊３人も程なく到着し、早速、鍋で豚汁作り。昨年の扇山ではお汁粉の餅が煮えずに失敗しましたが、今回は

2022.12.4　百蔵山山頂にて　（左から小西顧問、佐藤（周）、加藤、窪田、兵藤、井草、本間、山下、内山、淺香、岩崎）　撮影：加藤博行

まずまずの出来ではなかったでしょうか。（「七味」があればもっと良かったとの声あり）

暖かな日差しの下で昼食休憩後、記念写真を撮って下山。途中、足の速い学生隊には名勝「猿橋」の見学を勧めて先行して貰うことに。ＯＢ隊もバス停から徒歩組とバス利用組に分かれ、猿橋駅で再集合すると間もなく下りの長野行（日に１本の長距離）電車が来て乗車。隣の大月駅で下車して懇親会場の「濱野屋」へ。学生隊の方が店には先着していました。

（行程）　ＪＲ猿橋駅（9:00）→（富士急バス）→ 百蔵山登山口（9:07）⇛ 百蔵山頂（11:15-12:00）⇛ 登山口（13:30）→（富士急バス 14:30）→ 猿橋駅（14:36）

３．懇親会（大月駅前「濱野屋」、15時～17時）

ＯＢ等９名と学生２名（淺香君を除く）の計11名で下山後の反省会を兼ねた懇親会。最長老の本間さんの発声で乾杯。生ビールで喉を潤しながら天候に恵まれた山行を振り返りました。刺身や馬肉などの肴も美味しく価格もリーズナブルで30人くらい収容の大広間もあり、大月方面で懇親会をするならお奨めの店です。外が暗くなりかけた頃にお開きとなり、大月駅始発の東京行き快速で帰京しました。

シャモニ・モンブランのろのろ歩き
～前編～

加地　幸雄（１９５８年卒）

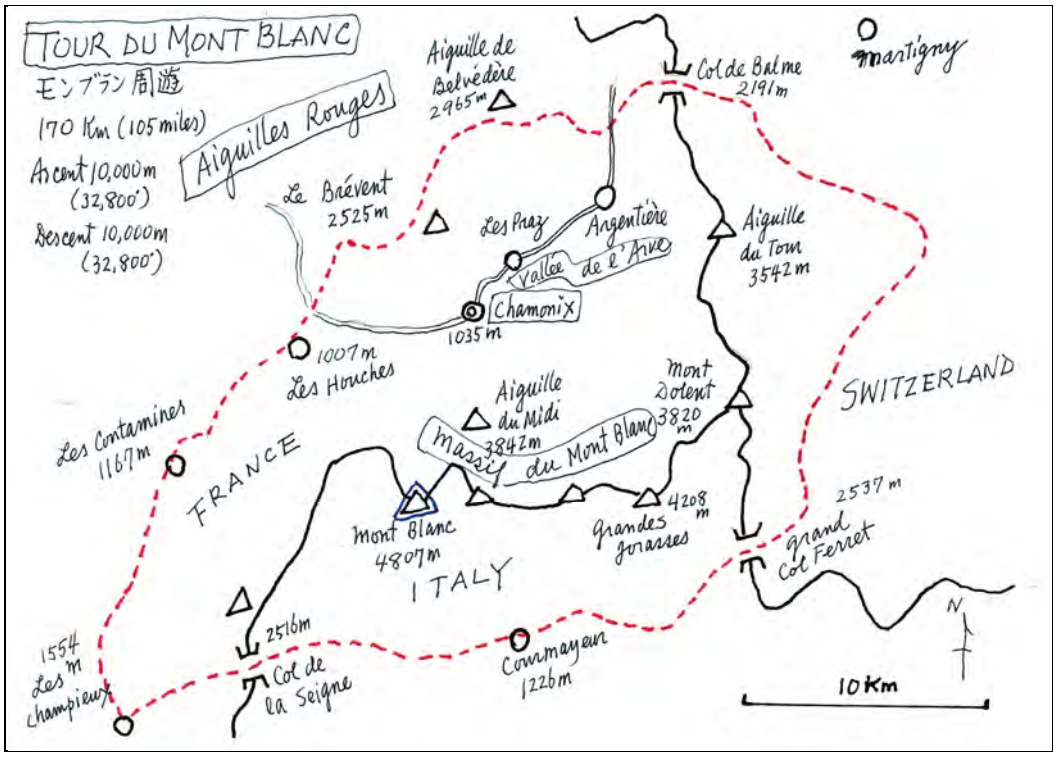
パリから車を飛ばして二日目、２０２２年９月10日の午後、穏やかに起伏する葡萄畑前方の天末線に連山が現れた。待ちに待ったフレンチアルプス。一時間ほど後、高速道路は狭間に入り、くりかえし車窓に頭を寄せ、絶壁上の天末線の在り処を確認する。車道が横切る斜面は急峻だが、頂には雪が無い。ほどなく谷は広がり両岸の山々は峩々として冠氷冠雪。シャモニの街の中の「家」に着いた。

北緯で云うと北海道最北端に当たるシャモニは深い谷底の町、標高約１０００ｍ。南東に３０００ｍから４０００ｍ級のモンブラン連山（Massif du Mont Blanc）が走り、北西には２５００ｍから３０００ｍの赤針山脈（Aiguilles Rouges）が連なる。（地図１）

谷を北東に詰めると10㎞でフランスとスイスの国境。モンブラン連峯の主稜線はフランスとイタリアの国境で、その中の Mont Dolent（哀れ山、３８２３ｍ）の頂は、これら三国の接触点に当たる。

蛇足になるが、そこで想起するのは北米大陸三大流域の接触点、源点地のこと。カナダに入って北東に流れハドソン湾に下る流域、西にコロンビア河となって太平洋に注ぐ流域、南東にミシシッピー河となってメキシコ湾に流れ入る流域の三つだ。20年ほど前、カナダから入って大陸分水嶺を南下し始めた時、この三大流域共通の源点、すなわち三大分水嶺の集中点を通過した際、そこに鎮座する岩に、もろ足で大地を踏みしめながら小便をひっかけて、生理化学的捺印をし、山の神様に「をろがみ」した。20年前なら三国共有の Mont Dolent の頂にも同様に「をろがめ」たかもしれぬ。機を逸した。

写真１　Mont Dolent　撮影：加地幸雄



地図１　Tour du Mont Blanc　作図；加地幸雄

ついでに忘却のかなたに消えると嘆かわしいので、生理的な話を続けると、ある夏山で、T中さんのズボンの前が開いていたので締め忘れたのかと思い「開いていますよ」と注意したら「風通しがええからええじゃねえか」と叱られてしまった。流石自然の寵児T中さん。また、茂木さんはいわゆる「雑撃ち」に十分時間をかけるので、茶目っ気な山本さんは「蝮が肛門から入り込むぞ」とからかっていた。無駄口をたたかぬ茂木さんは、聞き流し反応なし。

最近五、六年、念願の山歩きの一つは、名にし負うモンブラン周遊(Tour du Mont Blanc)だった。ルートは地図１に点線で示した。名は「モンブラン周遊」だが、実は「モンブラン山系周遊」。この山系には４８０７ｍのモンブラン(白山)を最高とし約25㎞の主稜線には富士山より高い山が16峯、氷河が40本以上ある。コースは全長１７０㎞、上り１００００ｍ、下り同じく１００００ｍ。要所要所に山小屋があるので日帰り装備で結構。強い人は10日で歩く。すると一日平均17㎞、上り１０００ｍ、下り１０００ｍ。これはどうやら僕には無理。そこで考えたのは経路の一部分、例えばシャモニに近い Les Houches からイタリアの Courmayeur まで10日ほどかけて歩き、その先は次の機会に、という案。ところが頼りにするベルリンに住む息子の昌が多忙に過ぎ休暇がとれぬとか、疫病の蔓延りなどで延期続き。その間歳月人を待たず、老化現象も止めどなし。各行動日後、二日休憩しても可能かどうか怪しくなってきた。例えば二日目の Les Contamines-Les Chapieux 間は18㎞で１３１６ｍの上りと９２９ｍの下り、四日目の Refugio Elisabetta-Courmayeur 間も同じく18㎞だが、４６０ｍ登りの後１５６０ｍの下りがある。これは体力の限界を越えているのではないか。そうこう思案中、昌から提案が来た。「Chamonix か Courmayeur を基地にして日

帰り山行は如何」と。

この提案は、確かに安全度が高く思われ、調べてみると両方ともベースに適している。シャモニは観光客が殺到し、物価も宿泊費も高くつきそうだが、山岳博物館もガイドを育てる国立登山学校もある。２０１８年だったか12月のある日、南米最南端のパタゴニアで氷河歩きに赴いた際、氷河専門ガイドはシャモニから来たフランス人だった。冬はシャモニ・モンブランでは客が稀なので、パタゴニアの夏に出稼ぎに来ていたわけ。とにかく登山の伝統では、シャモニは Courmayeur を凌ぐようだ。僕は山歩きだけだが、それでも登山の伝統に少しでも肖りたいとシャモニを選んだ次第。

ところが９月５日の塩湖城からの旅立ちを控えて、７月末にコヴィッド発病、衰弱甚だしく連日の寝込み。山行どころか欧州の旅さえ疑われたが、三週間経て突然快復、時を移さず体力の挽回と訓練に努め、出発前二週間地元のウォサッチ連山で日帰り山行６日。山行訓練には山行が好適、また年長けても訓練効果有りと確認した。

シャモニの宿泊先は昌の選択。如水会館より数倍巨大な建物の一階の南東角。教室大に近い居間兼食堂から直接外出できるし、窓からは聳え立つ岩峯を仰ぎ見、書架には著名な登攀家 Gaston Rebuffat（１９２１―１９８５）の「星と嵐」（Etoilles et Tempetes）や「雪と岩」（Neige et Roc）をはじめ登山関係の本、その他文学、地理、歴史、料理と七、八百冊並んでいる。広々とした寝室は三つ、台所も完備していて富豪の別荘の様。山に足を向けぬ家内も含めた僕ら五人組には絶好の選択。その建物の大半は、モンブラン初登頂二百年記念堂も一部にある有名な山岳博物館（Musee Alpin）だが改築中か連日閉館であったのは遺憾であった。

モンブラン四景

西ヨーロッパで最高のモンブランは、１７８６年にシャモニ村の29才の医者 Michel Gabriel Paccard（１７５７―１８２７）と山に結晶石を探し回る24才の Jacques Balmat（１７６２―１８３４）の二人組が、ピッケルもアイゼンもザイルも無く、棒を頼りにして、村人が望遠鏡で見守る中、初登頂を成就した。この快挙が近代登山の嚆矢となり、近代登山の中心地としてのシャモニが誕生した。それから約八十年後アルピニズムは隆盛を極めた。

当時の主役の一人に Edward Whymper（１８４０―１９１１）がいる。１８６５年７月のマッターホルン初登頂で有名だが、モンブラン山系では前年の７月に Mont Dolent（３８２０ｍ）、１８６５年マッターホルン登頂の一月前の６月に Grandes Jorasses（４２０８ｍ）をそれぞれ初登頂した。この頂は鋸のようだが、その頂点の一つは Pointe Whymper と呼ばれ、シャモニの町には彼の業績を記念する「Whymper 通り」もある。僕らが現役の時に使っていたテントの一つにウィンパー・テントと呼ばれるものがあった。名のとおり彼が設計したテントで、彼以前には登山用のテントは無かった。今年創部百周年を迎える一橋山岳部もシャモニ・モンブランに端を発した Alpinisme の余波であると感得する。地図１に示すモンブラン山系の主稜線は、谷底のシャモニの町からは前衛の山々に遮られて殆ど視界外。Mont Dolent や Grandes Jorasses も見えない。モンブラン（４８１０ｍ）自体は例外だが、丸い頭を僅かに見せているだけで奥の奥に鎮座しますの感だ。

町から見るモンブランの突出度は零に近いが、高度差は顕著だ。「家」からモンブラン頂上は僅か９㎞で高度差は約３８００ｍ。さらに近い Aiguille du Midi は「家」から４㎞で高度差は約２８００ｍ。

写真２　夕日に映えるモンブラン　撮影：加地幸雄

写真２は夕日に、写真３は朝日に映えるモンブラン。どちらも「家」の戸口から撮影。写真４は３８４２ｍの Aiguille du Midi から、写真５はシャモニ谷対岸の Aiguilles Rouges にある Chalet de la Floria（１３３７ｍ）と称する山小屋から。因みに Aiguille du Midi（「正午の針」）の名は、シャモニのある教会から見ると、正午に南中する太陽が垂直な針に指されることに由来するという。その教会の真北に正午に立つ太陽崇拝者は、太陽、Aiguille du Midi、教会の先端の十字架と自身が一直線に整列する神秘感を体感するに違いない。

写真２は「家」の南側の戸口からの景色だが、居間の東窓からは写真６の山々が見える。右側は Aiguille du Plan（３６７３ｍ）、中央は Aiguille de Blaitiere（３５２２ｍ）、左側は Charnoz Grepon（３４８２ｍ）。

写真７はシャモニの町から撮ったもので、Aiguille de Blaitiere が雲間から姿を現してい

写真３　朝日に映えるモンブラン　撮影：加地幸雄

写真４　Aiguille du　Midi からのモンブラン
撮影：加地幸雄

写真５　Chalet de la Floria からのモンブラン
撮影：加地幸雄

写真６　居間の窓から三峯　撮影：加地幸雄

る。峨々たる山を背景にし、樹林帯を前景にした棚が見えるが、その棚がbalconと呼ばれ、僕ののろのろ歩きに最適。

写真8は同じ三峯をシャモニ谷の反対側のバルコンから観た景色である。

～次号へつづく～

写真7　シャモニの街から大棚
撮影：加地幸雄

写真8　Aiguilles Rougesから三峯
撮影：加地幸雄

追悼 ― 蛭川隆夫 会員

蛭川紀巳子様

この度の蛭川先輩のご逝去に付いては心よりお悔やみ申し上げます。

またご逝去に至る経緯につきまして丁重なるご説明も戴きありがとうございます。

今年山岳部は創部百周年を迎え、蛭川先輩ご逝去の連絡を戴きましたのは、奇しくもこの百周年記念北岳山行の途上のことでした。この山行には蛭川さん（このような呼び方をさせていただくことご容赦ください）と学生時代から一緒に苦楽を共にされた諸先輩も大勢参加されていましたので、蛭川さんがお元気でおられたなら、この山行に北海道から駆け付けられたのではないかとも思っております。

10月1日無事北岳山頂に立ちましたが、快晴の下、見事な山容を見せる富士山を前にして登頂者全員で蛭川さんへの黙祷を捧げさせていただきました。

ご主人を「経済学部よりも山岳部を卒業されたような人」と書かれておられますが、まさしく今天国にいる「山岳部卒業生」は現在下界にまだいる我々卒業生より総勢として多くなっているのではと思いますし、天国で部活動をしておられればはるかに面白い山登りをされているだろうな、と思いを馳せております。

このような丁重なご挨拶をいただきましたことに御礼申し上げますと共に、ご主人様のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

前神直樹（針葉樹会会長、1976年卒）

卒業後の蛭川さんとの山行など

竹中　彰（1964年卒）

蛭川さんとの交友は山岳部入部と共に始まりました。合宿では1年生9名を含め、中川リーダー（1961年卒）以下総勢26名は涸沢で定着後に3パーティに別れて縦走に移り、我々は中尾峠から飛騨側に抜け、笠ヶ岳をスタートに針ノ木峠まで縦走する予定でした。しかし、中尾峠を越えて新穂高に着いた

ところで、蛭川さんが酷い靴擦れで歩行困難となり（朧げな記憶では鋲靴だったのでは）、下山を指示されて泣く泣く降りて行きました。その際に彼が荷物を整理する中で比較的大きな菓子缶にタバコがぎっしり入っているのを目撃して驚きました。

卒業後、蛭川さんとの山行が復活したのは、小生が富山から本店、東京支店への転勤後でしたが、それも宮仕え期間中は互いに忙しく、山行の機会はあまりありませんでした。

互いにある程度時間が取れるようになると、近郊の山、蛭川さん拘りの山に彼のステップワゴンに同乗して向かう機会が多くなりました。特に腰痛に悩まされた彼のリハビリを兼ねた山行が多かったと思います。

また「日本秘湯を守る会」の存在を教えてくれ、何度かの山行後の麓の温泉で「会」加盟の宿を訪ね、スタンプ帳を埋めることに励んだこともありました。

後年には「昼から会」（当初は「蛭川会」と呼称、１９６０年に山岳部入部同期のトーチン会、戸山高校山岳部同期、日立製作所、彼の翻訳ビジネス関係者、針葉樹会員有志等からなる同好の士の集まり）が有力な止まり木となっていました。

「昼から会」の山行で印象に残るものは、会発足（２００２年12月）早々に雪の丹沢・鍋割山での一泊忘年会に行ったこと、その後八ヶ岳の北横岳にも。更に日本語教師だった彼が、韓国語の影響で「峠（トッケ・ドッケ）」に関心を寄せたこともあり、また、針葉樹会の大先輩の望月さんの著作なども繙き、山梨・静岡県境の「高ドッキョウ」などと言う山に向かったこともありました。（考察を会報110号に寄稿）

また、先輩思いの彼は愛車に１９４８年卒の石井さん、山崎さん等の大先輩をお乗せして山に向うこともありました。

針葉樹会有志の会として、山本健一郎さん（１９５８年）が主宰して如水会館で定期的に懇談会（当初は「三木会」その後は「三月会（さんげつ）」が開催され、「甘露」を片手に佐薙さん（１９５６年）など常連メンバーである古い先輩の貴重なお話や、博識の山本さんの蘊蓄話に耳を傾けていました。

その会の中から、幾つかの山行計画が生まれ、南の宮之浦岳や北海道シリーズに彼を含む多くの老若の針葉樹会員が参加し、楽しく交流しました。この会の纏め、書記役も山本さんの後を彼が引継ぎ、その後には本間さんや小生にお鉢が回って来ました。

この三月会の場で、以前先輩方がＮＺのMilfordtrack Trekkingに向かった経験を伺ったことなども引き金になり、トーチン会有志によるMilford行きを彼が中心になって緻密な計画を策定し、夫々夫婦連れで２００７年１―２月に実行したことがありました。（村上さんは直前の家族のご不幸で参加断念。）

山本さんが２００７年２月に亡くなった後に、山本夫人からのご依頼により青葉台のご自宅と蓼科の別荘に共に出向き、書籍や山道具などの片づけをお手伝いし、その蔵書処分の過程で、上原さん、倉知さん等の支援を得つつ彼の活躍により文庫目録の整理・作成など細かな作業を経て北岳の麓「芦安山岳館」に「針葉樹文庫」が開設されたことが思い起されます。

先日の一橋山岳部創部百周年記念の北岳山行の最終日に現役部員の諸君に現地で見学しながら「文庫」を紹介し、今後末永く維持管理活動に関わって頂くことをお願いしました。なお、幾つかのパーティで北岳頂上を目指した中で、10／1に長老組（ＳＳ隊）の９名が頂上から北の空に向かって蛭川さんの冥福を祈って黙禱を捧げたことを申し添えます。

蛭川さんが札幌に転居以降も、北海道電力に勤務していた小野会員（１９６５年卒）を中心に冬のニセコ界隈でのＢＣスキーや北海道の名峰をめぐる山旅等を共にし、或いは

トーチン会メンバーの集会なども企画して貰い、家内と札幌のお宅にも伺ったことがありました。

２０１３年12月に心臓手術を受けてからも時に入院することもあり、このところのコロナ禍にあって、無用の外出を避けるなど慎重に生活していたことは仄聞していましたが、今回の様な脳出血でアッという間に永の別れになるとは、それも正に百周年記念事業の北岳登山プロジェクト実施直前に起こるとは全く予想していなかったことなので、本当に何と言っていいのか、との心境でした。

同期の中では３年生の時に、滝谷の第四尾根で滑落し、頭を強打、酷いダメージを受けて障害の残った名和君の面倒をよく見てくれていたことも彼の人柄がなせたことかと思い、現在はあの世で久闊を叙しているのではないかと想像しています。

名和さんに続き蛭川さんが亡くなったことで、今やメンバーは5名と寂しい限りですが、中橋さん、長沢さんも病に取付かれて山行は望むべくもなく、僅かに在京メンバーの本間さんと小生が「昼から会」メンバーと細々と丹沢や周辺の低山を這い回っているだけになりました。

あの世で蛭川さん等先行するメンバーとの再会も遠くないと思います。

なお、11月下旬にコロナ禍の間隙を縫ってトーチン会企画で「蛭川さんを語る会（お別れ会）」が開かれ友人たちにより故人を偲んだこと等も併せて報告したいと思います。

改めてご冥福を祈ります。

（２０２３．１．12記）

蛭川さんの思い出

本間　浩（１９６５年卒）

小生、早稲田の安部球場のネット裏の叔母の家に一時下宿していました。家は坂道の途中に在って、この坂を上がって右に折れ、チョット行くと信号があり、渡ると蛭川邸でした。

家業はお茶屋さんで、２階にあがって廊下を進み、突き当たりの左側の３畳か４畳半が彼の城です。壁面は高校の頃に読んだと思しき文学全集でビッシリ、大きいスピーカーで、近所迷惑と思える程ガンガンクラシックを鳴らす。「東京」の学生にビックリが、初印象！

聞けば、小生と同じ予備校、高田馬場の「一橋学院」出身のようで。同期の中橋さんも一緒のようでした。彼らは成績順位が一桁組で、お互いに顔は知らなくても名前は承知の間柄のようでした。山岳部のオリエンテーションで顔を合わせ、互いに「君が○○か！」と懐かしがったそうです。小生は成績が「三桁」でしたので残念ながら、無名の存在のようでした。

トーチン会（山岳部同期の名称）のメンバーは、西日本出身者は皆現役、東も一浪とは言え優秀で、小生は頭と身体の両面で苦労しました。が、最近ヤット、近くの頭は使えばいい、重い荷物は押し付ければいいと悟り、気分が楽になりました。

彼は岳部４年ではリーダーを務め、名和君の事故の後を引き継ぎ部を引っ張っていった功績はありますが、彼の真骨頂は60歳を過ぎてからに在ったと考えます。それは前期と後期に別れ、前期は東京に在って体力気力に満ち山登りが充実していた時期、後期は札幌移住もあって自分の山と同時に針葉樹会員の道内山行の案内役を勤めた、言わば世の為人の為に尽くした時期です。

屋久島の「宮之浦岳」から始まる大型山行で、北海道の「ニペソツ」「礼文・利尻」「大

雪山」「トムラウシ」と続く北海道シリーズ。海外ではニュージーランドの「ミルフォードトレッキング」「キリマンジャロ」。最後の２０１３年、静内山岳会で行ったマレーシアの「キナバル」、と精力的に登山活動をおこなっていました。

お互いに60歳を過ぎて又一緒に登り始めた頃、小生が彼の最大の功績と考える「昼から会」を結成しました。「昼から会」は彼の戸山高校山岳部及び一橋山岳部の同期、勤務先日立製作所時代の山仲間を集めて結成したグループです。それに奥様連も加わり「昼から会」の最初の忘年会には韓国人夫妻も参加するという云わば「ごった煮」の様なグループです。これも彼が「山好き」だったからでしょう。

「昼から会」では、三つ峠から御坂山地、天子山塊、愛鷹山と富士山をぐるりと囲む山々をよく歩きました。２月、雪の雨ヶ岳から見た南アルプス、毛無山から真正面に見た富士の「大沢崩れ」は特に印象に残っています。

この仲間も一人欠け二人欠け、そして今回蛭川さんを失った訳です。

会員も今や80歳を越え、山もママならぬ人も出てきていますが、街場での交流（酒飲み）は続いています。本当にイイ会を作ってくれたと感謝しながら、山に酒に励んでおります。

感謝と云えば、「北海道シリーズ」への貢献です。

在京時には登山計画は勿論、行路計画から車の手配・運転まで、移住後は地元の利と持ち前の几帳面さを生かした面倒見の良さでした。

「礼文・利尻岳」「トムラウシ・アポイ岳」「大雪山」「羅臼岳・斜里岳・雌阿寒岳」と、北海道シリーズは7月上旬の定例山行でした。又山岳部ＯＢで作る、数岳年（昭和38年卒～同43年卒）を網羅する三四郎会では「岩木山・白神岳」「函館山・恵山・横津岳」とお世話になりました。

個人的には「駒ヶ岳」「当別丸山」「松前城」「手稲山」と色々な所を案内して貰いました。

彼の「案内」は先ずよく調べ、地元に問い合わせ、専門家プロ級の人間に現地案内を頼むという徹底したものでした。それが静内山岳会の山田さんであり、函館の内城さん、白神の牧田先生だった訳です。尤も、札幌の植物園の案内にも人が付いたのには驚きました。これも血液型Ａの面目躍如たる処ですが。

実は私も血液型はＡ型です。尤も、彼の「真正Ａ」に対し、私は「Ａ型モドキ」です。

私は面倒くさがり屋で調べものが苦手で、そういう時は彼に頼みます。彼も分からない時は図書館に行って調べてくれたようです。例えば、

・黒人霊歌「ジェリコの戦い」や「ドライ・ボーンズ」の英歌詞と邦訳を探してもらう。
・中島みゆきの「銀の龍の背に乗って」の意味は？　旧約聖書の「風の翼に乗って約束の地へ帰る」や映画「龍の翼に乗って」との関係は？とか。
・マトモなのは、「木の名前の付く山」は？多分これは一緒に「小楢山」に行った帰りの質問でしょう。唐松岳（北ア）・空木岳（中央ア）・大唐松山（南ア）……
・彼の得意分野の「縄文時代　本州・北海道の時代対比表」を送ってもらった事も。
・マガンの観察ツアーに彼が参加した時は、ガンの「ねぐら入り」「ねぐら立ち」の詳細な報告を受けた事もありました。

彼には聞きたいこと調べてもらいたい事がまだまだ有って、特に北海道へのロシヤ人の進出と日本側の対応如何。これは是非纏めて欲しかったと思っています。

彼が亡くなると云う事は、私にとって図書館を一つ失うことを意味します。

彼の山行記録を見ると登った山の数の多さに驚きます。先の大型の山行から所在地も定かでないような多分地方の小山？まで丹念に歩き回っていたようです。

本当に山好きなんだ、と感心させられます。ただこれが五体満足の状態でなされた訳ではない、腰痛を抱えながら登り続けた処に一種「凄み」を感じます。

一緒に登り始めた頃に、最近山梨にイイ先生（鍼？整体？）を見付けて通っていると言っていた事がありましたし、加藤さんと小川山を10時間かけて往復した時は流石に腰にきたようで、増冨鉱泉の宿では座椅子に座っていました。一段と高いので「まるでお殿様だネ」と冷やかしたこともありましたが、よく頑張ったものだと感心もしました。

８年前の心臓手術からはペースが落ちたようですが、その分フィールドワークに転進して縄文遺跡の発掘現場や鳥等の生態観察に一段と力を入れたようです。イズレニシテモ、好奇心は休みを知らなかったようです。

本来であれば、近々お会いできることを楽しみに、と述べたいところです。が、小生は八十八の歳に、有志と共に越後の「米山」（「米」を分解すると八十八となります）に行く計画を温めているのでそうもまいりません。おまけに、２０２２年、小生は「米山」を途中下山してしまった、その悔しさも有っての話です。

貴兄は長い間、身体と頭を休みなく使い続けました。お疲れだったでしょう。しばらく仮眠を取られては如何？

では又。

（２０２２年11月18日）

去年、「ニセコアンヌプリ」と小樽近郊の「塩谷丸山」に行く計画を立てました。

北海道新幹線が札幌まで伸びると函館本線は廃止になると聞いて、の計画です。彼に話した処、「塩谷丸山なら今でも登れる」との返事でしたので、「ジャア　決まったら一緒に登ろうヤ」と話は纏まったのですが。残念なことです。来年、追悼を兼ねて「塩谷丸山」だけにでも行こうと考えております。

蛭川さん追悼

中橋　寿雄（１９６４年卒）

蛭川隆夫さんは、山岳部での我々同期の会（踏椿会＝トーチン会）のメンバーを率いた、よきチーフリーダーであった。在学中も、卒業後も、踏椿会や三四郎会等で、リーダーシップを大いに発揮してくれたと思う。昨年九月二十八日、突然彼の訃報に接し、早過ぎる死に驚ろいた。残念至極であった。「人は、無から生じて無に帰するなら、その途上にある生も、また無の中にある。老子」とは言え、やはり心からの悲しみと寂しさを禁じ得なかった。生前の蛭川さんと「老子の思想」についてメールを介して話し合ったことがある。老子の「無為自然（むいじねん）」という言葉があるが、その意味は「何もしないのではなく精一杯の努力をし、あとは天地自然の原理や変化を、そのまま受け入れること」である。これを自分流に言い換えると、「あるがままのものを、あるがままに受け入れながら、すなおでしなやかであることが、まことの強さである」と言うことになる。蛭川さんは、この思想のままに

実践し、生きてきた人物だったと思う。常に前向きに、行動力・指導力・人間性を発揮できる、頼りになるリーダーであり、仲間であった。私が四年生の年、ゴールデンウィークの合宿時、いくつかのグループに分かれて穂高連峰の周辺に入山した。

我々のグループは、竹中リーダーのもと、西穂高から奥穂高まで縦走し、穂高小屋を経由して涸沢に降りるコースであった。その途中、私が、不覚にも滑落事故を起こしてしまった。奥穂高の頂上付近から飛騨側の白出沢の雪渓上を約五百メートル滑落したが、奇跡的に白出大滝の上で止まることができた。ただし右足首を複雑骨折していた。その近くの岩場で、救助に来てくれた竹中さんと二晩ビバークしたあと、周辺に入山していた山岳部の仲間が終結し、救出活動をしてくれた。急峻な白出沢を尾根伝いに運び上げて、穂高小屋を経由して、涸沢小屋まではスノーボートで降ろす作業であった。運び上げる時は、背負子（ショイコ）に石油缶を括り付け、その上に怪我をした私が後ろ向きに腰掛け、担ぎ手はフィックスしたザイルを手繰って上り坂を駆け上る。数人のメンバーが交代しながら、運び上げてくれた。蛭川さんも、そのメンバーの一人として、大きな掛け声をかけつつ駆け上ってくれた。竹中さんをはじめ、先輩や後輩を含む多くのみなさんに助けられ、九死に一生を得たわけであるが、中でも、蛭川さんのあの時の力強い姿と掛け声が、今も忘れられない。感謝しつつ、ご冥福を祈りたい。　合掌

蛭川隆夫さんの思い出

小島　和人（１９６５年卒）

蛭川隆夫さんご逝去の知らせは、昨年９月29日の早朝、一橋山岳部創部１００周年記念北岳集中登山に出掛ける八王子駅ホームで竹中先輩より伺いました。暫く体調を崩されておられると伺っていましたが、まさかこんなに早くお亡くなりになるとは思ってもいませんでした。驚きと寂しさとを胸にそのまま登山に参加、10月１日早朝北岳山頂にて皆で先輩のご冥福を祈って黙祷を捧げました。蛭川隆夫さんとご一緒した多くの山行と髭面の優しい笑顔が思い起こされ、コロナでアポイ岳登山の希望がこの年も延期になったことが悔やまれました。

私は１９６１年に一橋大学に入学し、入学直後に小平の大学前期校舎内にあった山岳部部室を訪ねてお会いしたのが前期責任者であった蛭川さんでした。真っ黒に日焼けした体格の良い、いかにも山岳人らしい風貌から、私は少々怖そうな印象を受けました。入部してすぐに蛭川さん達から指導を受けて、登山靴・キスリングなど揃え、山行が始まりました。

谷川雪渓訓練、岳沢前期合宿、剣沢夏合宿と続きましたが、前期合宿は勿論、全ての合宿で一年先輩の蛭川さんには親切に基礎から登山技術を教えて頂き、すっかり優しい兄貴のような存在になっていました。今回調べて判明したことですが、１９６１年の秋合宿に臼井リーダーの下、蛭川さんと共に悪沢岳・荒川岳を経て10月４日に北岳に登っていました。昨年は61年後の10月、同じ北岳に立っていたことになります。ご縁というものかなと思いました。

それから二年たって、蛭川さんが山岳部のリーダーになられた年の春山合宿・横尾尾根から奥穂高岳、冬合宿・明神岳東陵から前穂岳では共にアタック隊の一員として蛭川さんのご期待に応えることが出来ました。私が大学山岳部員として、取り敢えず一人前になれたのも蛭川さんのご指導があったからだと感謝に耐えません。

卒業後の5年間は会社勤めの合間を縫って山登りに精を出し蛭川さんともご一緒したこともありましたが、勤め先で、国産コンピュターを世界に売り出す、挑戦的なプロジェクトに巻き込まれて、おおよそ35年間山登りから離れました。

２００５年の秋に会社勤めが卒業に近づき、山本健一郎先輩からお便りを頂き、三月会（さんげつ）に参加しました。そしたらなんと蛭川さんが幹事を務めておられ、再びお世話になることになりました。２００６年の3月には蛭川さんの同期の皆さんと私の同期、一年下の同期で幕山にハイキングして真鶴の民宿に一泊の大懇親会が開かれ、このメンバーで蛭川さんを会長とする三四郎会が結成されました

以来蛭川さんには国内海外の沢山の山に誘って頂きました。蛭川さんは学生時代にもまして準備周到で、事前に実に細かく調べ念入りに計画を立てて安全登山を実践していました。国内では北海道の山々に多くお誘い頂きました。最初はニペソツ山です。２００６年の2月に計画が発表され、三月会で何回も打ち合わせてから9月に山行は実施されました。佐薙・上原大先輩はじめとする十数名の大部隊でしたが三井リーダーの下、蛭川さんが幹事役を務めて楽しい山行になりました。私にとっては復帰後の最初の大懇親山行で疲れましたが、ナキウサギなどに初対面して忘れがたき山行になりました。その後、２００７年の利尻富士登山、２０１２年トムラウシ・大雪山山行と蛭川さんの先導で楽しませて頂き、この北海道シリーズで高山植物の楽しみも教わりました。この間、２００８年にはキリマンジェロ登山が計画され、蛭川リーダーの下、4月たぬき湖の施設で合宿、沢山の事例が披露され、天子山塊の長者が岳等に登り、さらに7月東北の障子が岳に登ってから仙台に出て厚生病院で全員身体検査まで受けました。その間蛭川さんはナイロビの旅行社や航空切符手配の国内旅行社と数多くのメールをやり取りして、実に細かく旅程・装備等チェックされていました。沢山のメールは私の古いパソコンに記念に残しています。蛭川さんのアドバイスを得て、遠藤先輩と私は、代々木の三浦高地トレーニングセンターに3日ほど通いました。私の無呼吸症候群が発見されると適したクリニックまで紹介してくれたのが蛭川さんでした。かくのごとく準備万端整えて10月ナイロビ経由タンザニアに入り、10月12日の深夜から、可なりの風と零下10度の暗闇の中を登り、日の出と共に13日の午前6時に中川・遠藤・蛭川さんと共にギルマンズポイント５７０３ｍに立ちました。その時の蛭川さんの満足そうな顔が今でも思い起こされます。

この様に、針葉樹会活動でも蛭川さんに大変お世話になりました。山の事ばかり書きましたが、多くの同僚がご存知のように蛭川さんは実に多くのことに興味を持ち、徹底して掘り進みました、私の知る限り、正しい一橋山岳部歌、縄文遺跡、シマフクロウ、そしてもっとも最近はアポイ岳に生息する絶滅危惧種の蝶・ヒメチャマダラセセリ保存活動でした。

61年間お世話になった蛭川さんのご逝去は未だに信じられない悲しいことですが、今年の夏は、蛭川さんのお墓参りをして、蛭川さんの愛したヒメチャマダラセセリのいるアポイ岳に登り、ご冥福をお祈りしたいと思っています。

蛭川さん、大変お世話になり有難う御座いました。そちらでも何か新しいテーマを選んで愉しんでください。

合掌

追悼　蛭川隆夫会員

蛭川会員の訃報に接し、会員のみなさまから寄せられたメールなどをまとめました。

（編集子）

9月8日に蛭川さんとお電話で話したばかりの訃報に驚きました。札幌に引っ越されて12年、とうとう北海道でお会いすることができなくなりました。

シマフクロウやアイヌのことでもっともっとお聞きしたいことがありました。

佐薙さん、蛭川さんと行った「なめとこ山」の旅、今でも思い出します。

山崎　孝寿（特別会員）

貴兄の訃報に接し、良き友を失ったこと、残念でたまりません。多趣味な貴兄のこと、やり残したことが多々あるでしょう。いま、あの世に行くことは、私以上に残念・無念のことでしょう。それを思うと涙を禁じ得ません。

ただ、蛭川さんのことだから、あの世でもすぐに沢山のやるべきことを見つけてご活躍なされるでしょう。

また逢う日まで、ご冥福をお祈り申し上げます。

遠藤　晶土（1962年卒）

蛭川さんに初めてお会いしたのは9年前の10月に金峰山長野県側登山口の岩根山荘にOB8人、学生4人が集まった時でした。その後蛭川さんの依頼で姪御さんと天狗山・金峰山に登ったり、メールの交流があり、ゼミの先輩としても畏敬する存在でした。

心よりお悔やみ申し上げます。

藤原　朋信（1969年卒）

朝一番からのショッキングなニュースでした。北八つの新人歓迎山行から2年冬の明神合宿まで、ほぼ全ての合宿で蛭川リーダーの

1963年12月明神岳東稜ヒョウタン池にて
（右端が蛭川会員）　撮影：岡田健志

2017.7.17　釧路川にて　撮影：中村雅明

訓導の下での山でした。瞬時にすべての山での蛭川さんの思い出が頭をよぎりました。
心からご冥福をお祈りします。

原　博貞（１９６６年卒）

2018.7.26　天塩川にて　撮影：中村雅明

蛭川先輩とは、先輩が卒業された年に私が入学・入部したため、社会人になってからの付き合いになります。

ホームページ（ＨＰ）の編集、図書幹事の在り様など針葉樹会の会務の遂行に多大なアドバイスをいただきました。そして、先輩が北海道移住後は、彼の地での山行で大変お世話になりました。

特に忘れられないのは、私がはまっていたカヌー漕行に興味を示され、釧路川や天塩川での漕行をご一緒できたことです。詳細はＨＰに載せたいと思い、ここではその時の写真だけをご紹介します。

蛭川先輩、本当にお世話になりました。ご冥福をお祈りいたします。

中村　雅明（１９６８年卒）

山と私　1
～笛吹川と父～

石原　脩（１９５５年卒）

生まれて初めての山は父に連れられて登った小楢山だった。塩山から笛吹川に出て、雲峰寺に一泊し、焼山峠を経て登頂したが、11歳の少年には塩山までの帰路が遠く辛かった。

明治38年生まれの父・常寿は、学生時代陸上競技部の主将だった。対校戦ともなると、短距離走から棒高跳びまでの万能選手だったと聞かされていた。

それが、支那事変に予備役少尉として出征し、貫通銃創を負って右腕が麻痺した儘になったので陸上を諦めて登山に転向したのだった。

終戦の翌年、鳳凰山に登った時は、中学２年だったが、燕頭山山頂付近の道は熊笹に覆われ、足で探りながら進んだし、３日間誰にも会わなかった。その後父と登った金峰山・甲斐駒ケ岳も全て山梨県の山だった。父は子どもの頃、中央線甲府駅の近くで育ったので、

朝夕、見慣れた山々に限りない郷愁を持っていたのだと思う。

中でも、父は甲府盆地を縦断する笛吹川に愛着を持っていた。若い頃、友人と笛吹川東沢の金山沢を国師岳まで遡ったが、沢を埋める倒木が凄かったという話は何度聞かされたか分からなかった。私との山行では、信濃川上から千曲川源流の西沢を詰めて甲武信岳に至り、頂上小屋の水場から釜の沢を下降した。さらに、当時の国語の教科書に、田部重治氏の「笛吹川を遡る」として所載されていたのは、釜の沢と金山沢の中間にあたる信州沢で、これは私と友人・波多野の二人で登った。これを聞いた父は、親子二代で笛吹川東沢の源流を全て踏破したと喜んでいた。

私が物心ついて以来、世田谷の自宅の本棚には山の案内書や雑誌がかなりのスペースを占めていたが、それらは中学生になった私の愛読書になった。なかでも桂川流域の天狗伝説が面白く今でも覚えている。戦時中は入手困難だった五万分の一の地図も沢山あったが、磁石を使ってのその読み方と、山中でのケモノ道の見分け方、そして観天望気は、父からの貴重な教えだった。当時の「山」に対するわたしの印象は、「奥深く未知なるもの」であった。未知なるものへの憧れは「山」に行く原点なのに、この後、登攀自体が面白くて忘れたこともあった。もう一度原点に戻ったのは50歳に近くなってからだった。

甲府盆地から見える茅ヶ岳を登り終えた頃から、二人の目標は北岳だった。当時は夜叉神峠越えの車道がなかったので、中央線日野春駅から大武川を遡り、甲斐駒と鳳凰山の鞍部を越え、野呂川に降りてから漸く北岳に登り、間ノ岳・農鳥岳を経て奈良田に下るものだった。40歳を超えた父と15、6歳の私とでは文字通り荷が重かった。また、沢登りに興味を持ち出した私の父離れが進んでいたので、実現しなかったのが今でも心残りだ。

（大先輩の石原脩会員から「山と私」という長編の原稿が寄せられました。分割して会報に載せていきたいと考えています（編集子））

『山讃賦』を巡る余話
～作詞者が書き残した「山讃賦」の由来～

加藤　博行（１９７６年卒）

針葉樹会報151号（２０２２年11月）に、漢字の読み方に長く異論のあった部歌「山讃賦」について、歌詞の読み方を早く統一して、後の世代に歌い継がれることに注力したい主旨の拙文を書いた。同様の内容は、百年記念誌の１６９ページにも掲載されている。

12月下旬に、会報の拙文について、ユタ州ソルトレークシティー在住の加地さん（１９５８年卒）からコメントをいただいた。内容を要約させていただくと、

1．部歌の歌詞の統一の試み、五音節と七音節の間に一字空け、「ところ」と「みやい」に統一することに賛同する。

2．「ところ」「みやい」の読み方は、五七調に合う強みもあり、岩波古語辞典に「ところ」は「トコ（床）と同根、ロは接尾語、一区画が高くなっている平らになっているが原義」とあり、その好ましい原義が「でんどう」にはない。

3．題名「山讃賦」は作詞者の造語であろうが間違いで、造語としては「讃山賦」が正当であり、この間違いを踏襲する必要はないのではないか。

4．統一歌詞には、新旧かな使いの混同がある。二番の「うへ」四番の「ゑまい」を残すなら、二番の「おろがめ」は「をろがめ」三番の「唱えつゝ」は「唱へつゝ」にすべきである。但し、芭蕉の手書きにも「お」と「を」、「え」と「へ」の混同はよくある。

注1．「ゑまい」は笑えみ、「おろがめ」は、拝めの意味と思われる。

注2．加地会員は、芭蕉の俳句の評論を発表されるほどの研究者である。

加地さんには、百年記念誌の中で185ページの写真（元ＡＡＣ会長のニコラス・クリンチ氏との親交を通じてＡＡＣに寄贈された吉沢文庫）掲載に大変なご協力をいただいた。その加地さんからの見解1と2に勇気付けられたのは言うまでもない。「でんどう」「きゅうてい」と唄っていた時代の会員から、はじめて「ところ」と「みやい」に積極的な支持をいただいた。更に、「ところ」については、より良い解釈を与えていただき、嬉しかった。

その一方、漢字熟語の構成として誤りを指摘された詩題「山讃賦」については、これまでも同様の指摘が一部の会員からあった箇所である。その一方、作詩者が、「やま、それを讃える詩」の意味で作詩したのであれば、尊重されるべきであるとの意見もあった。ここは、京大学士山岳会の部歌「雪山讃歌」と似たような言葉の組み合わせと理解し、原作者のタイトルを尊重したい。

4のかな使いは、私が漢字の読み方に力点をおいていたので、かな使いの統一まで気持ちが廻らなかったのが正直なところである。

今回再び「山讃賦」の題名やカナ使いに話が及んだので、再び原作者の松崎武雄氏はどういう人で、どのような経緯から、この詩が寄稿されたのか、改めて知りたくなった。

そして調べ始めて間もなく、如水会館5階の図書閲覧室に「一橋山岳部　百年」が収められたことを確認に行ったとき、思わぬところで、何と松崎氏自身が「山讃賦」について書いた小文に辿り着いた。

如水会館図書閲覧室の係の方が保管していた「一橋応援歌集」に、松崎氏自身による「山讃賦」について、と題した寄稿文が昭和33年2月発行の歌集巻末に、掲載されていたのだ。

少し長くなるが、多分殆どの会員がこの文面をご存じないと思うので、ここに全文を記したい。なお同応援歌集は戦後発行されて版を重ね、私が目にした歌集は平成16年3月発行版である。

「山讃賦」について

松崎　武雄（昭和3年学部卒）

私達の予科のクラス会「風雲会」の名物男、吉沢一郎君が、大正14年つまり私達が本科1年の時に「一橋山岳部で、今度『山』という会誌を出すことになったから、君、何か山に関する詩を書け」という。

私は信州飯田生まれの山猿だが、山といえば中学生の頃12、3人の学友と、富士山へ登ったことと、郷里の近くの山々へ野営には屡々行った以外、山らしい山へ等登ったことはない。そして、おまけに私は詩人でもない。

吉沢君の命令は少し無理かと思ったが、創刊号に祝意を表する意味で、一つ書いてみようと思い立って、筆をとった。

富士山の五合目あたりで道に迷い、お鉢巡りの森林をぐるぐる4、5時間彷徨し、終いには泣き出す者も出て来たが、夕刻、遥かに下方の道を登って来る甲府中学生に救われ、その日、予定の八合目までは登れずやっと五合目で泊まった時の、あの夜明けの山のイメージが鮮やかにかつ詩的に筆の先を往来し

た。

三節迄書いてあと二節をと考えていると、吉沢君がもう締切るから早く出せと催促する。そこで大急ぎに第四節だけで締めくくりをつけて出した。

だから、今考えてもこの第四節は、いかにもゴツゴツと生硬な感じがして、恥ずかしいのである。

昭和三年、卒業の翌年頃、旧友の鎌田一郎君が君の山讃賦が今度作曲されたと言って、音譜を送ってくれたので、ああそんなこともあったかと、初めて思い出し、早速先輩、川田義彦氏の奥さんにピアノで弾いて頂き、自分の作詞がメロディに乗せられたことを非常に嬉しく思ったが、それ一度きりで勿論、耳覚えもなく、忘れ去ったまま、二十何年かが過ぎてしまった。

去る昭和三十三年の五月、伊豆で卒業三十周年大会が開かれ、久し振りに旧友と相会したが、新宿から小田急電車のなかで、これも同じクラス会の母校教授太田可夫君から、君の山讃賦が母校でよく唄われていると聞かされ、又びっくりした。

其後、アンデスに遠征した吉沢君が、その山頂のキャンプで隊員諸君と共に、これを唄ったと聞かされ、感また一入であった。

（昭和38年2月11日）

一橋応援歌集の「山讃賦」には、松崎氏の作詩と石川強氏の譜面が載っている。一部ルビが振られ、これまで議論となった漢字では、「霊香」は作詩のページには「れいきょう」、譜面には「レイコー」、「殿堂」「宮廷」は、「ところ」「みやい」とルビが振ってある。

しかしそれ以外にも、もとの詩に色々手が加えられていて、原作者松崎氏が厳密にチェックしたものが掲載されたとは言い難いようだ。従って、議論がまた混乱するので、ここでは掲載は省略したい。また松崎氏の文章を読む限り、ご本人は、自分の詩がメロディが付けられて歌われていることに感激されている。

今回作詞者の小文に辿り着けたことは、当時の経過を鮮やかに蘇らせてくれた点で、誠に良かったと思っている。また作詩者が太田可夫教授と同期であったこともわかって驚く。山岳部が応援部等他部との交流をあまりしてこなかったので、意外と世間知らずであったかもしれない。

当会としては既に原作により忠実な形で「創部百年統一歌詞」を決めて歌い始めている現在、あらためて作詩と譜面を再検討する必要はないと考えている。寧ろ、次の一橋応援歌集には、「創部百年統一歌詞」を譜面と合わせて掲載するよう依頼したい。

そして私の今の関心は、折角決めた「創部百年統一歌詞」をしかるべき声楽のグループに合唱してもらい、それを録音して、後の代に引き継いでおけないだろうかと思案を巡らしている。それがこの素晴しい部歌が統一した歌い方で確実に後の世代に伝承される道と信じている。

会員でどなたか、声楽グループを紹介していただけませんか。ご協力のほど宜しくお願いします。

如水会館図書閲覧室書架に収められた創部百年記念誌

会務報告

総務幹事　加藤　博行
（１９７６年卒）

２０２３年新年会

日時：２０２３年１月18日（水）
18:00～20:00
場所：如水会館14階「記念室東西」

Ⅰ．出席者及びオンライン参加者

■会場出席者　23名

会員：本間浩（１９６５）、小島和人（１９６５）、佐藤久尚（１９６６）、岡田健志（１９６７）、中村雅明（１９６８）、井草長雄（１９７３）、前神直樹（１９７６）、加藤博行（１９７６）兵藤元史（１９７７）、佐藤活朗（１９７８）岡部寛史（１９８０）、中西茂（１９８１）、小林修（１９８１）、稲毛尚之（（１９８４）、山本礼次郎（１９８４）石丸義男（１９８５）、白石章治（１９８６）川名真理（１９８８）、佐々木豪（２０２１）、内山晴貴（２０２２）
（　）内は卒年
学生：猪股ひかり（3年）、淺香俊敬（2年）、関響太郎（2年）

■オンライン参加者　4名

石原脩（１９５５）、谷津範之（１９８２）、糟谷知紀（２０１０）、小西大（山岳部顧問、１９８７）
（新年会に寄せられたお便りは別添）

Ⅱ．新年会

コロナ禍はまだまだ残るものの、昨年より多くの会場参加者を迎え、かつ１９８０年代卒業会員８名の参加を得たのは有難いことであった。

創部１００年記念の年、冒頭前神会長より新年の挨拶があり（挨拶全文は別添）続いて、小島相談役の発声で乾杯し、食事会に入った。食事をしながら、兵藤幹事からの昨年12月に完成した百年誌の総括報告を聞き、中西会計幹事による１００年記念特別会計中間報告（直近の会計報告別添）と続いた。特別会計では賛助金の受領が徐々に進んで、あとは若い世代からの賛助金が期待される処である。今後余資があれば追加事業も検討して、７月の総会に提案したい旨、事務局から話があった。

会員によるスピーチは、「百年誌　私の時代」というテーマで、最長老の石原会員より戦前の全盛期に追いつこうとしたが、道具の不足で足回りは地下足袋等苦労した話から始まり、各自１～２枚百年記念誌から写真を選んで、自分の山岳部時代のエピソードを語った。また今年卒業する４年生からは、４年間のうち３年はコロナ禍で厳しかったこと、後を次ぐ新主将、副将からは、今後の活動に向けての抱負が述べられた。最後に、創部百年

2023.1.18　新年会

【一橋山岳部　創部100周年記念事業関連予算・実績　進捗報告】

（2023年2月10日時点）

（単位：円）

支　　出						収　　入					
（項目）	予算（新年会）	見込(総会時)	見込(23新年会)	実績（2/10付）	備考	（項目）	予算（新年会）	見込(総会時)	見込(23新年会)	実績（2/10付）	備考
1)100周年記念誌関係						1）特別協賛金					
・記念誌発行費等	2,332,000	2,400,000	2,684,000	2,684,000	確定　※1	①市川会員特別協賛金	1,500,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	※2
・発送費、通信連絡費等	225,000	225,000	83,000	83,000	送料等	2）特別協賛金他					
						①会員特別協賛金	1,500,000	1,700,000	1,640,000	2,610,000	2/10 時点実績
2）針葉樹会報デジタル化関係						②販売その他			65,000	130,000	同上
・会報デジタル化経費	250,000	257,000	257,000	257,000	確定						
・戦前会報デジタル化	0	131,000	131000	131000	確定						
3）その他											
・記念誌発行関連会食等	100,000	187,000	50,000	50,000	学生・若手OB座談会、						
・その他経費	93,000				ヤマノ印刷慰労会等						
4)予備費	0	500,000	500,000	500,000	剰余金（市川氏関連）						
	0	0	0	1,035,000	剰余金(その他)						
（支出小計）	3,000,000	3,700,000	3,705,000	4,740,000		（収入小計）	3,000,000	3,700,000	3,705,000	4,740,000	2/10時点入金額
次年度繰越											
（合計）	3,000,000	3,700,000	3,705,000	4,740,000		（合計）	3,000,000	3,700,000	3,705,000	4,740,000	

注）予算（新年会）　：2022年1月臨時総会総会承認の予算原案
　見込（総会時）　：2022年7月定期総会時の実績見込み
※1）発行費増額理由　：カラーページ大幅増加、年表等によるページ数増加

【詳細内容】

（支出）

・記念誌発行費　：300部（ヤマノ印刷）　支払い済
・発送費　：会員へ発送済（22年12月末）
　　購入希望者等追加発送分のみ未確定
・会報デジタル化経費　：ヤマノ印刷、しまだ文具店他支払い済

※2)**市川会員からの特別協賛金　：**
　市川陽一会員（’59卒）より、創部100年事業支援として、200万円を特別寄付
　いただいた(2021/12/9)。
　有難く本特別予算に150万円を充当し、50万円は別途予備費とする。

（収入）

・2023年2月10日時点　特別協賛金及び 記念誌販売による入金実績　：4,740千円（96名）
・配布明細　：会員向け199部/学生向け 12部（学生へ10部、部室閲覧用2部）
　　協力者向け（写真提供者等）28部/外部団体（メトロ会）14部、部外5部
　　計258部、在庫42部（他にヤマノ印刷無償提供9部あり、計51部）

統一歌詞で山讃賦を声高らかに熱唱し、兵藤副会長の閉会の挨拶で終了した。

今回もリアル／オンラインのハイブリッド新年会となったが、やはり会員同士がリアルで顔を合わせるに勝る懇親の場はなく、次回以降もより多く若い世代の会員が参加できる場にしていきたい。

新年のご挨拶

前神　直樹
（針葉樹会会長、１９７６年卒）

明けましておめでとうございます。

昨年は百周年記念で会員、学生の皆さんには本当にいろいろやっていただきありがとうございました。北岳集中登山は信じられないような好天に３日間も連続して恵まれ、参加者の皆さんはそれぞれのパーティで登頂を果たしてもらいました。小さなことはありましたが、大きな事故もなく無事下山出来たことは本当に良かったと思います。

また月見の宴は井草ＯＢのご厚意で、鳩里庵を借りることができてこれも本当に良かったです。本来ならば昔と同じように部室で宴会を持ちたいところですが、学内での飲食が禁止されている以上、外でやるしかありません。普通の飲食店ではなかなか学生とじっくり話すこともできず、今回の鳩里庵のような大広間で一堂に会せたのは非常に意味あるものだったと思っております。

年末には百周年記念誌の発刊となったわけですが、これは会員の皆様から絶大な協力をいただいた結果完成したものです。中身は皆様がご覧になった通り家族アルバムのような体裁になっていますが、山岳部という集団が家族のような仲間意識を持っていたからこそ自然に出てきたものだったと思います。このような仲間意識は、豪雨や吹雪のため、何もすることもなしに狭いテントの中に閉じ込められたこととか、緊張感を持って対処しなければならない現場に一緒した時とかに生まれてくるものと思いますが、そのような場面を今の学生にも是非経験してほしいと望んでいます。

この３年間は、大学当局のコロナ規制も厳しく、泊りを伴う幕営山行など許されなかったわけですが、これから規制も緩和され長期山行もできるようになると信じています。やはりある程度緊張感があるような状況でなければ仲間意識も生まれないでしょうし、今後学生は長期の山行を実行し、様々な場面を経験してもらいたいと思っています。

本日の新年会には盛りだくさんの企画が予定されていますので、私の挨拶は短めにいたします。本年の会員皆様と学生諸君の安全登山を祈念して、新年の挨拶とさせていただきます。

「一橋山岳部　百年」発行にあたって
～御礼とお願い～

―　前記「進捗報告」（Ｐ33参照）にもありますように今回針葉樹会員各位および物故会員の家族の方々のご協力もありまして、特別協賛金は当初予算を大幅に上回る額を計上することが出来ました。

厚く御礼申し上げます。

一方、１９９０年代以降卒業のＯＢからの特別協賛金は極めて低調です。未払いの方は是非送金いただきますようお願い致します。

―　今回の記念誌で、記載致しました写真キャプションや文章に間違いがありましたらお知らせください。すでにご指摘いただいたものもありますが、今後のご指摘も纏めて正誤表を作成することにしております。

2023年1月針葉樹会新年会(兼臨時総会)案内状に寄せられた近況　　2023年1月18日

卒年	お名前	参加/オンライン	近況（出欠に加えてメッセージがあったもののみ掲載しています）（注は近況後の補足）
1955/昭30	石原　脩	オンライン	今夏の脊椎管狭窄症手術から復活。朝夕2回の近距離歩行に加えて、趣味の声楽にも復帰、久しぶりにヨーデルにも出てきました。
1956/昭31	石和田四郎	不参加	輝ける101年に向って会の発展、諸兄姉の益々のご健勝をお祈りいたします。 100周年に関する諸事業に献身下された会長、担当幹事、其の他の諸兄姉に心から御礼申し上げます。 老生、来年は「卆令」です。遥けくも来つるものかな、学友の友情に感謝です。
1956/昭31	松尾寛二	不参加	ご連絡多謝。残念ながら歳のせいか少し疲れたので欠席します。 針葉樹会の発展と、諸兄の健康、御活躍を祈ります。「一橋山岳部　百年」楽しみに待ってます。
1956/昭31	佐薙　恭	不参加	盛会を祈ります。
1958/昭33	加地幸雄	不参加	盛会を祈ります。特に山岳部の新会員に激励の言葉を送ります。 今年は、9月にシャモニー、モンブランに足を伸ばしました。今年の山行日数は、12月24日現在69日。27日に山行を計画していますが、吹雪く予報で、潰れそうです。
1958/昭33	新井慶司	不参加	病気療養中です。（注；新井会員はこの返信の後1月7日逝去されました。ご冥福をお祈り致します。）
1959/昭34	澤木一夫	不参加	体調不良その他の理由により欠席させていただきます。皆様の盛会を祈ります。
1959/昭34	市川陽一	不参加	3か月前に自身の不注意で腰椎圧迫骨折をして、現在普通の歩行にも不自由して山行は暫くご無沙汰して居ります。眼前の比叡山脈（現在雪景色です）を眺めて無聊を託っています。又、頂いた100年誌は完璧な出来栄えで感嘆して飽かず眺めています。編集に携わった方々ご苦労様でした。新年会の大盛況を祈念致します。 皆様どうぞ良い年をお迎え下さい。
1960/昭35	丸子博之	不参加	針葉樹会新年会、是非出席したいと思っていましたが、体調不良が続き、本日主治医より当分外出・会合出席を控えるよう指示を受けました。誠に残念ですが欠席します。 盛会であります様。良い新年をお迎え下さい。
1960/昭35	中西　厳	不参加	会務ご担当ご苦労様です。敬意を表します。 秋、降雪前の八方尾根を、第三ケルン、八方池まで行ってきました。白馬三山は、山麓の緑、中腹の紅葉、山並みの白銀が、素晴らしいコントラストでした。 春の、連休後あたりの、残雪の白馬三山と麓の桜を楽しみにしています。
1962/昭37	三井　博	不参加	37年卒の三井博です。体調不良のため、欠席させていただきます。 盛会をお祈りいたします。
1963/昭38	多田伸治	不参加	百周年記念誌楽しみにしています。皆様のご努力に感謝します。
1964/昭39	竹中　彰	不参加	明けましておめでとうございます。新年会のご盛会を祈ります。 昨年は針葉樹会の母体の山岳部が創部百周年を迎え、記念山行、記念誌発行等の記念事業が行われ、そのうちに小生も参加できたものもありました。 北岳では色々とご心配をおかけしましたが、幸い大事に至らなかったことにホッとしております。同時期に蛭川さんが亡くなったことが大変悔やまれますが、その後関係者が如水会館に集って懇談し、見送ることができたことがせめてもの慰めです。 本年の山行は14日の奥多摩・笹尾根からスタートの予定です。本年も宜しく。

―上記正誤表も含めまして、年内あるいは来年には補遺のようなものも作成予定です。

今回掲載出来なかったような写真や、記載できなかったエピソードを盛り込むことができればと考えています。エピソードとは例えば記念誌２ページの写真に出ておられる田中顧問は、のち神戸大学山岳部長となり日本最初のパタゴニア遠征を組織されたというようなものです。このような古い話でなくても面白そうなエピソードあればお知らせください。またこれぞというような新たな写真もありましたらお願い致します。

（針葉樹会会長　前神　直樹）

卒年	お 名 前	参加/オンライン	近況（出欠に加えてメッセージがあったもののみ掲載しています）（注は近況後の補足）
1965/昭40	小 野　　肇	不参加	おめでとうございます。今年もよろしくお願いします。新年会残念ながら欠席です。 元気で生活しています。皆さんによろしくお伝えください。
1967/昭42	吉 川 晋 平	不参加	盛会を祈ります。
1968/昭43	中 村 雅 明	参加	昨年の山行は明暗別れました。 明は6月に針ノ木岳、10月に北岳の山頂を大学4年以来55年振りに訪れました。両峰とも絶好の快晴に恵まれ、360度の大展望を楽しみました。暗は6月末の南会津の荒海山からの下山時の転倒による胸部強打の回復が遅れ、夏山に行けませんでした。10月の北岳からの下山時も足の疲労がひどく、バランス（体幹）が悪くなり、体力も衰えてきたことを実感しました。 創部100周年記念事業の一つ、「針葉樹」、「針葉樹会報」のデジタル化が完了しホッとしています。 皆さんのご協力に感謝します。図書幹事は今年度限りで新任の井上さんへの引き継ぎを始めます。また宜しくお願いします。
1969/昭44	藤 原 朋 信	不参加	昨年は記念誌の発行など皆様の活躍や、学生たちの活動を見て元気になりました。 私事では昨春危なかったのですが、年末には脳検査、心臓機能検査で異常なしと、薬効果で糖尿数値もここ数年で最良になりましたので、今年はだいぶ動けそうです。 また宜しくお願いします。
1971/昭46	金 子 晴 彦	不参加	100年誌ご苦労様でした。歴代の眩い笑顔が印象的です。
1977/昭52	兵 藤 元 史	参加	3年ほど関与してきました百周年記念写真誌が漸く完成し、皆様に発送できました。 どんなご評価を頂けるか些か不安ですが、新年会会場、HUHACあるいは針葉樹会報に、ご忌憚のない感想や写真に関するエピソードなどをお寄せ頂ければ幸です。
1978/昭53	佐 藤 活 朗	参加	案内ありがとうございます。久しぶりに参加させていただきます。よろしくお願いします。
1979/昭54	佐 藤 周 一	不参加	年明け18日の新年会、リアル参加いたします。 それまでには腰の具合も少しは良くなっていることでしょう。（注；残念ながら不参加となりました。）
1980/昭55	米 田 篤 裕	不参加	家族旅行の予定があり、残念ながら臨席オンラインとも参加できません。盛会を祈念しております。どうぞ良いお年を。
1982/昭57	谷 津 範 之	オンライン	オンラインで出席いたします。よろしくお願いいたします。
1984/昭59	稲 毛 尚 之	参加	100周年記念誌、有り難うございました。懐かしさが胸に溢れました。 休日は都内のウォーキングで体力維持に努めております。
1984/昭59	山本礼次郎	参加	今年もよろしくお願いいたします。 出席を予定しております。
1984/昭59	安 島 孝 知	不参加	会のご盛況を祈念しております。私は最近、病院、訪問診療クリニックの経営にいそしんでおります。
1985/昭60	石 丸 義 男	参加	地元富山で2020年2月末から勤務（三井物産 在北陸支社）しております。 今年初から故郷 射水市の依頼に拠り、射水市政策アドバイザー委嘱受け（100%ボランティア）、地元の活性化や国際化に微力乍ら、汗もかいて居ります。 又、ハンガリーとの縁が帰任後も続き、在日ハンガリー商工会議所会頭代行（副会頭兼専務理事）を今夏から（会長が辞任、不在の為）拝命、活性化に精を出して居ります。（此方も100%ボランティア） 毎日、天気の良い日には、立山連峰の勇姿を愛でて居ります、当に“見れども飽きず神からならし”ですね。
1986/昭61	白 石 章 治	参加	NHKにいました白石が2008年に制作しましたNHKスペシャル「夫婦で挑んだ白夜の大岩壁～クライマー山野井夫妻～」が、明日（土曜）の深夜に再放送されます。（本件は事前にご案内済）2023年1月8日(日）前1:05～2:04　※土曜深夜 G総合＆NHKプラス かつて世界最強とよばれ昨年ピオレドール特別賞を受賞した、山野井泰史の登攀を記録したドキュメンタリーです。ご覧になるのは難しい時間帯ですが、ぜひ収録や配信でご覧いただければ幸いです。
1988/昭63	川 名 真 理	参加	あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。
2022/令4	内 山 晴 貴	参加	先日百年誌を受領致しまして、諸先輩方のご活躍を、貴重な写真と共に興味深く拝見しております。お送り頂きましたこと感謝申し上げます。
2022/令4	井 上　　仁	不参加	大変恐縮ですが、針葉樹会新年会については当日予定が重なっており、会場・オンライン共に不参加とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

追悼　新井慶司会員

市畑　進（１９５８年卒）

今日、1月16日（月）新井（旧名朝木）慶司君の告別式に参加した。新井君は東村山の徳蔵寺の次男で、学校に通う西武線の中で、津田塾に通う夫人万亀子さんを見初め、めでたく結婚した、この話は学生時代にも耳にタコができるほどよく聞かされた。徳蔵寺の別棟に新婚所帯を持った後、すぐに、わたしと小林博が奥さんの手料理で招待をうけた。

在職中は、全く付き合いなかった。5年に一回の周年記念で会うぐらいだったが、会社卒業後だったか、バブル絶頂期にこの夫婦と同期の上原君と一緒に鳩山ＣＣでゴルフをして、ご自宅で夕食を一緒したのが最後だった。

同期の岡垣君のときは、知らせもなく、行きそびれたが、今度は、友人として見送ろうと決めた。

通夜に行ってもよいが、知っている人は誰もいないかもしれない、コロナ罹病リスクも厄介だということで告別式に決めた。

やはり、知っている人はいなかった。納棺の際、万亀子夫人に挨拶、よく覚えていますといい、頂いた１００年史は、主人は大変喜んで写真の自分を含めた同期を黄色のサインペンでマークして、俺もこんな山に登っていたんだ、孫二人に伝えるため、もう一冊買うことにしたと話しながら、生前の写真や遺品の展示場所に案内してくれた（たしかに黄色のサインペンでマークしてあった）。

葬儀は盛大でベルク（スーパー）の会長原島一誠、社長原島保、ニトリの似鳥昭雄、元衆議院議員山口泰明の供花、30人位の供花で祭壇は埋められていた。最上段に張替（はりがえ）正敏、張替成好等張替家の供花が並んでいる。わたしの人生で出会ったことのない姓名だ。調べると、張替正敏はＪＡＸＡ理事／航空技術部門長らしい。親族席にいたから姻せき関係があるのだろう。山口泰明の息子で一橋大大学院卒の衆議院議員山口晋も出席していた。

新井君の経歴要約の中でベルク本社誘致に寄与したという、確かにベルクは２０１５年２月に本社を寄居町から鶴ヶ島市に移転している。キリンビールを早期退職して地域の発展に努力していたことがうかがえる。

加藤　博行　様

万亀子夫人との小会話では、新井君は俺の学生時代には、危険を冒しても、こんな所に登ったのだ。孫、男二人にも、ジジイを見習いなさい、というニュアンスでした。

かつて、子供に危険なことをやらせるなという風潮で部員が減少に次ぐ減少だったことを思うと、新井君はよくぞ云ってくれましたという感じです。

１００周年記念写真集は、意外な効果を引き起こしたと云うことをお伝えしたかった。

（２０２３年1月17日記）

訃　報

以下の会員が亡くなりました。謹んで報告いたしますとともに、ご冥福をお祈りいたします。　（総務幹事　加藤博行）

秋元　邦夫	（1949 年卒）	2022 年 1 月
尾身　幸次	（1956 年卒）	2022 年 4 月 14 日
大島　理則	（1948 年卒）	2022 年 7 月 16 日
蛭川　隆夫	（1964 年卒）	2022 年 9 月 28 日
須山　修平	（1955 年卒）	2022 年 11 月 27 日
塩川　清彦	（1958 年卒）	2022 年 12 月 11 日
新井　慶司	（1958 年卒）	2023 年 1 月 7 日

■山岳部の 2023 年度体制は以下のとおりです。
（2023 年 1 月 1 日～同年 12 月 31 日）

主将	淺香	俊敬	2	装備	下西ノ園	尚樹	2
副将	関	響太郎	2	総務	重岡	諒	2
副将	田村	健	1	書記	塚本	亮太	2
会計	亀井	奏良	1	記録	中林	茉厘	1

数字は1月時点の学年

現在の部員数　3年0名、2年8名、1年9名

■卒業生の進路は以下のとおりです

佐々木　豪	院/社会学	日本IBM㈱
伊東　瑠香	国際・公共政策大学院	伊藤忠商事㈱
山下　弘喜	商	パシフィックコンサルタンツ㈱
猪股　ひかり	社	環境省
岩崎　太一	法	未定
神田　陽太郎	経	損害保険ジャパン㈱
平野　智士	経	三菱地所㈱

2022 年 1 月～12 月　山行表

一橋大学山岳部

時期							コース	メンバー
年	月	日		年	月	日		
2022	1	14	～	2022	1	15	稲子湯−本沢温泉−稲子湯	佐々木(CL、社研2)、岩崎(SL、法4)、猪股(社4)、淺香(経2)
	1	27	～		1	29	夜叉神峠−南御室小屋−薬師岳−観音岳−地蔵岳−夜叉神峠	佐々木(CL、社研2)、岩崎(SL、法4)、猪股(社4)
	5	7	～		5	8	鴨沢−七ツ石小屋−雲取山−鴨沢	岩崎(CL、法4)、半澤(SL、社4)、下西ノ園(経2)、櫻井(法2)、重岡(社2)、塚本(経2)、中林(法1)、小松(経1)、亀井(経1)
	6	3	～		6	4	扇沢−大沢小屋−針ノ木岳−扇沢	岩崎(CL、法4)、山下(SL、商4)、半澤(社4)、奥野(法4)、関(法2)、重岡(社2)、吉川(社1)、亀井(経1)、小松(経1)、黒川(法1)、高(社1)、清水(社1)、田村(社1)、中林(法1)、前田(法1)
	6	18	～		6	19	尾瀬	淺香(CL、経2)、関(SL、法2)、重岡(社2)、高(社1)、清水(社1)、田村(社1)
	6	25	～		6	26	美濃戸口−行者小屋−赤岳−横岳−硫黄岳−赤岳鉱泉−美濃戸口	佐々木(CL/装備、社研2)、半澤(SL、社4)、吉川(社1)、黒川(法1)
	7	2					蓼科山	淵田(CL、社2)、荷月(SL、社2)
	7	9	～		7	10	西沢渓谷入口−雁坂峠−雁坂小屋−甲武信ヶ岳−西沢渓谷入口	淺香(CL、経2)、田村(SL、社1)、清水(社1)
	7	23	～		7	24	駒ヶ根−空木岳−木曽駒ケ岳−ロープウェイで下山	佐々木(CL、社研2)、岩崎(Sl、法4)、半澤(社4)、小松(経1)
	8	25	～		8	26	戦場ヶ原−湯本キャンプ場−日光白根山−菅沼	猪股(CL、社4)、関(SL、法2)、塚本(経2)、吉川(社1)
	9	3	～		9	5	羅臼岳、雌阿寒岳	下西ノ園(CL、経2)、淵田(SL、社2)
	9	4					御岳山−鍋割山−大岳山−奥多摩駅	半澤(CL、社4)、重岡(SL、社2)、高(社1)
	9	5					象潟登山口−鳥海山−象潟登山口	猪股(CL、社4)、神田(SL、経4)、岩崎(法4)
	9	9	～		9	11	上高地−涸沢野営場−奥穂高岳−涸沢野営場−上高地	山下(CL、商4)、半澤(SL、社4)、塚本(経2)、黒川(法1)、清水(社1)、田村(社1)、吉川(社1)
	9	25					南郷−軍刀利沢出合−大滝−生藤山−軍刀利神社	半澤(CL、社4)、淺香(経2)、小松(経1)、亀井(経1)、古田(OB)
	9	25					大倉−塔ノ−大倉	猪股(CL、装備)、塚本(SL、記録)
	9	30	～		10	2	奈良田−大門沢小屋(泊)−農鳥岳−間ノ岳−北岳−北岳肩の小屋(泊)−御池小屋−広河原−芦安	半澤(CL/装備、社4)、下西ノ園(SL/記録、経2)、古川(食料、社1)
	10	1	～		10	2	広河原−白根御池−北岳肩の小屋−北岳−広河原−芦安	佐々木(CL、社研2)、淺香(SL、経2)、田村(装備、社1)、重岡(食事、社2)、亀井(食事、経1)、関(記録、法2)、清水(記録、社1)、谷津(OB)
	10	16					那須ロープウェイバス停−峰の茶屋跡−朝日岳−茶臼山−那須ロープウェイ山頂駅	重岡(CL、社2)、櫻井(SL、法2)、田村(記録、社1)、中林(記録、法1)
							鳩ノ巣−越沢バットレス−鳩里庵	佐々木(M2、CL)、半澤(社4、SL・記録)、下西ノ園(経2)、関(法2)、小松(経1)、吉川(社1)
	11	12	～		11	13	上日川峠−大菩薩嶺−ロッヂ長兵衛−丸川峠−列石登山口	関響太郎(CL、法2)、田村健(SL・食糧、社1)、中林茉厘(装備・記録、法1)
	11	22	～		11	23	美濃戸口−赤岳鉱泉−硫黄岳−夏沢鉱泉−唐沢・桜平分岐	淺香(CL、経2)、淵田(SL、社2)、荷月(記録、社2)
	12	4					鳥沢−扇山−百蔵山−猿橋	岩崎(CL、法4)、山下(SL、商4)、淺香(記録、経2)
	12	11					小仏−景信山−堂所山−城山−相模湖	淺香(CL、経2)、下西ノ園(SL、経2)、中林(法1)

編集後記

針葉樹会の今年度最大の話題は？と言えば、間違いなく創部１００周年記念誌の発行と、北岳集中登山である。参加者全員で、北岳山頂集合写真を撮ろう、という計画こそ実現はしなかったが最高の天気にも恵まれ、当会ゆかりの北岳頂上をきわめることが出来たことを喜びとしたい。

また、時期を同じくして『針葉樹』や『針葉樹会報』のデジタル化も完成した。ここに当会は１００周年を機に、きわめて膨大にして貴重な電子情報を保有したことになる。１００周年誌編集委員や図書幹事のあくなき熱意は、称賛に値する。

１００周年記念事業の遂行には、可成りな費用が必要であった。京都の市川会員の長年にわたるご寄付を筆頭に、多くの会員や会員のご家族から寄せられた特別賛助金が事業の遂行を可能にした。まさに〝針葉樹会員ブラボー〟である。

アメリカ在の加地会員（１９５８年卒）は年間69日も山中ですごしておられる、登山現役。今号でもフレンチアルプスでのトレッキングを原稿にしていただいた。一方、石原会員（１９５５年卒）から「山と私」と題する長文（１７，０００字）の原稿をいただいた。こちらは、分割して掲載していきたいと思っている。

お二人に共通しているのは、針葉樹会や一橋山岳会に対する愛情が深いということだろうか？　このような「一橋山岳会愛」が１００周年記念事業を遂行可能とした。〝針葉樹会員ブラボー〟である。

このような「一橋山岳会愛」に支えられて山岳部も、ステップバイステップで登山経験を積み重ねて、素晴らしい山行を楽しんでもらいたい。

（岡田　健志）

■会費納入のお願い

２０２２年度（22年６月～23年５月）の会費納入をお願いいたします。

会費（**普通会費**）は卒業年次に関係なく、一律５０００円です。（ただし、卒業後60年以上経過した会員については会費免除となります）。

また、普通会費のほかに、期間を問わず**賛助会費**を募集しております。**賛助会費**は一口１０００円で、口数は任意です。

近年、学生部員の増加に伴い山岳部への支援強化の必要性が高まっておりますので、その資金手当てのためにも、**賛助会費**へのご協力をお願い申し上げます。

◎会費納入先◎
三菱ＵＦＪ銀行　赤坂支店
口座名　針葉樹会
口座番号　普通４８２５６４７

＊振込の際、適用欄にお名前と卒年次をご記入ください。

会計幹事　中西　茂

発行日　2023年５月８日 発行者　針葉樹会 （会長　前神直樹） 印刷所　ヤマノ印刷㈱	針葉樹会報 第152号	編集人　岡田　健志 〒248-0022 鎌倉市常盤937-53 会報幹事／岡田健志、藤本敏行

一橋山岳会ホームページ　http://huhac.com/